

## ソシオンのネットワークと鏡像のコミュニケーション(1)

—密告・盗聴のモードをふくむ会話のマトリックス—

木村 洋二 ・ 池 信 敬 子

## Looking-glass-selves in the Communication of Socions(1) Towards a Network Theory of Alienation and Information

Yohji G. KIMURA and Keiko IKENOBU

### Abstract

A matrix of communication of 4 socion units, I (A; first person), You (B; second person), He/Her (C; third person) and Somebody (D; "fourth" person) is developed in terms of the trust (P) and distrust (N) relationship. The crucial role of somebody (D; "fourth" person) is discussed intensively in the relation to the unidentifiable "otherness". The basic trust to "you", at least "one" second person of the network, is very essential to get the correct information from the environment, since "you" plays the intermediating role of truth/reality in the socion-network communication.

The lack of "basic trust" to you, or trustworthy you yourself, makes "me" (the first person) impossible to access to the correct information of myself ("the looking-glass-self"), which means, the feedback loop of the self-system will be broken. "I" will be necessarily isolated and "the others" may often become threatening force. Illusions and delusions, suspicions and betrayals as well, must be very possibly (and "reasonably") resulted. The stabilizing role of "he/her" is discussed. Finally, a 3D matrix model (named sociotron) of triadic communications among these four persons is exploited in order to explain the mechanism of "alienation" and "reappropriation of selves."

Keywords: socion network communication self other trust alienation information looking-glass-self narrative sociotron

### 抄 録

ワタシ A、アナタ B、カレ C、ダレカ D の 4 個のソシオンのネットワークをマトリックスで表現し、ワタシ A の視点から見た荷重コミュニケーションのモードを検討する。X に Y が Z について語る、という 3 項コミュニケーションのパターンを見るために、3 次元マトリックスが構成される。話し手をタテに、聞き手をヨコに配列することで  $4 \times 4 = 16$  のセルが生成される。話題の人を奥行き次元に振ることでさらに  $16 \times 4 = 64$  のセルからなるキューブが構成される。各セルは、A あるいは B、C、D が、A あるいは B、C、D に、A あるいは B、C、D について語る、いずれかのコミュニケーションのモードに対応している。それぞれのモードはどのような特性をもつのか、メディアの特性や、媒介による荷重の変換機能に注目して整理・分析する。今回は、1 人称 A についてのネットワーク・コミュニケーションを論じる。ワタシ A の鏡像の「もち出し」と「もち込み」、他者の場所への疎外と自己への回帰をめぐる鏡像の回路を中心に、「物語」としての「私」の構成が論じられる。

キーワード：ソシオン ネットワーク コミュニケーション 自己 他者 信頼 疎外 密告 情報 ソシオトロン 鏡像 物語

## はじめに

ソシオンは、社会的ネットワークにおけるコミュニケーションの媒介素子として人間あるいは集団を指すわれわれの造語である。ソシオン理論は関係における自己洞察を促進するための思考の道具となることを目指している。これまで自己システム、2者関係（ダイアッド）、3者関係（トライアッド）について基本的なループの構成と《くり込み-くり出し変換》のロジックを検討してきた<sup>1)</sup>。さて、ソシオンがたがいに自他の「鏡像」（うわさ、評判、宣伝、弁明など正負の荷重情報）を伝達しあうとき、ネットワークのなかではどのようなコミュニケーションがおこなわれるのだろうか。ワタシ A、アナタ B、カレ C、ダレカ D の4個のソシオンからなるネットワークのコミュニケーションをマトリックスで表現し、ワタシ A の視点から見たばあい、どのようなコミュニケーションのループが構成されるのか、モード別にその種類と特性を検討する。

### 1. ワタシ・アナタ・カレ・ダレカのネットワーク

#### 1-1. 人称と連結モード

ソシオン A を中心に、B、C、D 4個のソシオンからなる荷重ネットワークを考える。ソシオン A は1人称のワタシで、B は2人称のアナタ、ソシオン C は3人称のカレ、さらにソシオン D は特定できないダレカとする。

ワタシ A はワタシ自身の状態について「直接」知ることができる。1人称のワタシ A と2人称のアナタ B はたがいに「対話」が可能である。3人称のカレ C とワタシ A は、アナタ B を「介して」連結される。カレ C の外側に、ソシオン D を連結する。ソシオン D は、ワタシ A からはどれがダレカなのか特定できない「匿名」のソシオンと考える。ネットワーク上で、ワタシ A はアナタ B を介してカレ C と連結されるが、このダレカ D とはチャンネルをもたない。

以上4個のソシオンからなる荷重ネットワークを図1-1に示した。4者のネットワークをワタシ A を中心に構成することで、他者性のモードを人称別に類別することができる。

1) ソシオン *socion* (*socio-neuron*) はたがいに荷重しあう社会ネットワーク *socio-net* の結節素子として、個人あるいは集団を指示するための私たちの造語である。シナプス荷重を学習することで連結しあうニューロンからアナロジーをえて雨宮が命名した。最近の木村のモデルは「ソシオンの一般理論 (I)、(II)、(III)」に展開されている (木村 1999、2000、2001)。あわせて、本紀要に同時に掲載される「一般理論 (IV)」も参照されたい。

それぞれのモードにおけるコミュニケーションの特質を、ワタシ A の視野に即して理論的に検討する。

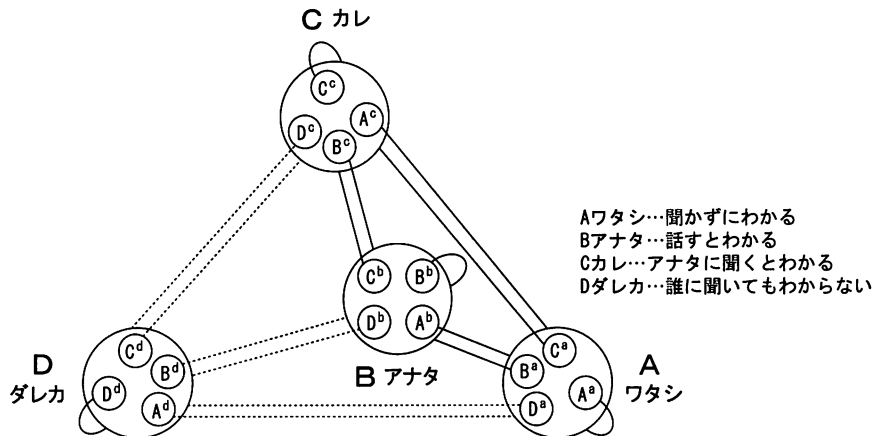


図 1-1 ワタシ、アナタ、カレ、ダレカの連結ソシオグラフ

A、B、C、D4つの円はワタシ・アナタ・カレ・ダレカのそれぞれのソシオンを表わす。その内部にある小円は、実線によって結ばれた外部のソシオンをたまたみ込んだサブソシオンを表わしている。ダレカDは、対象として直接指向できないので、破線で連結した。

## 1-2. 樹状連結

図 1-1 で示した 4 個のソシオン A、B、C、D は、ネットワークにおいてそれぞれの連結モードにあるソシオンを代表している。実際の社会的なネットワークでは、1 人称のワタシ A を中心に 2 人称のアナタ  $B_i$  や 3 人称のカレ  $C_j$ 、さらにダレカ  $D_k$  が複数連結して、樹状のネットワークを構成する。

図 1-2 はその位相構造を模式的に同心状のネットワークで示したものである<sup>2)</sup>。中心のソシオンがワタシ A、それに接続する同心円のなかの数個のソシオンがアナタ  $B_i$ 、そのソシオン  $B_i$  の外側にカレ  $C_j$  が任意に連結されている。さらにその外部にワタシ A との間に固定チャンネルをもたない D モードのソシオン、ダレカ  $D_k$  が(連結されないものもふくめて) 複数配置されている。

2) この図は各ソシオンからみたネットワークの視界をあらわしている(雨宮・藤沢・木村 1993: 147 より修正して再録)。B、C、D のソシオンそれぞれが、このようなソシオグラフ(サブ・ネット)を自己に中心化してつくっていることになる。ソシオネットは本来、それぞれのソシオンの表象×荷重空間にくり込まれた複数のサブネットが、メタ、サブ、オブジェクトの 3 階層にわたって交差しながら、「餅つき」のようにくり込み-くり出し変換を多重に行う複合ネットワークである(木村 2000)。

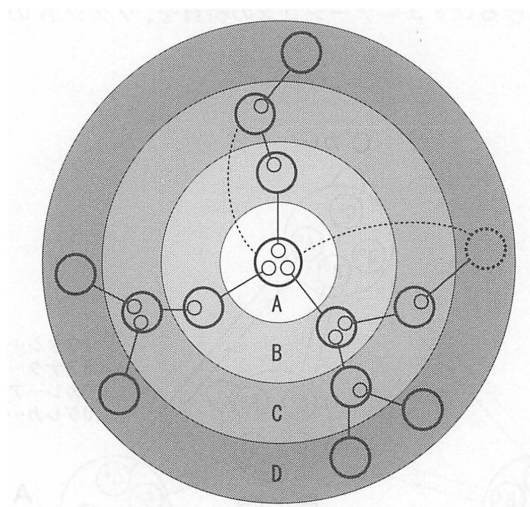


図1-2 同心円とトリリーの位相グラフ

中心の円がワタシAモードの領域、次の円がアナタBモードの領域、3つ目の円がカレCモードの領域である。その外がダレカDモードの領域である。Dモードの領域は、ワタシAからは見えにくく、ネットワークの暗闇となりやすい。

この連結位相では、ワタシAと直接結合しているのは、ソシオンBのアナタだけで、カレCはアナタBを介してのみワタシAと連結されている。そこからカレの荷重を増幅するアナタの重要な媒介機能が発生する。ダレカDはカレCと連結されているか、誰とも繋がっていない。この連結位相を超えるかたちでAとC、AとDのあいだを直接連結する破線が書きこんである。それらの破線は、ワタシとカレ、ワタシとダレカの直接のコミュニケーションをしめしており、それぞれ後に検討する特有のメディアによって可能となる。

ワタシA、アナタB、カレCというソシオンの連結モードはそれぞれ1人称、2人称、3人称の人称モードにほぼ対応している。ダレカDを4人称とよんでもいいが、勝手な人稱を創造することはつつしんで、本稿ではネットワーク上の連結モードに限定してワタシをAモード、アナタをBモード、カレをCモード、そしてダレカをDモードの他者とよぶことにしたい。まず、コミュニケーションのマトリックス表記を説明し、モード別に各セルの内容を概観した上で、最後に鏡像のコミュニケーション回路とその社会的特性を検討する。

## 2. ソシオマトリックス

### 2-1. マトリックスの次元

4者の荷重ネットワーク内の鏡像コミュニケーションをマトリックスに表わしたのが図2-1である。たがいに一定の信頼あるいは不信によって荷重結合したA、B、C、D 4個のソシオンが、それぞれについての荷重情報（鏡像）を送り、また受け取る、という荷重コミュニケーションの様相を網羅的に表現している。

A	A	B	C	D
A	$(A^a)^a$ A:A→A	$(A^a)^b$ A:A→B	$(A^a)^c$ A:A→C	$(A^a)^d$ A:A→D
B	$(A^b)^a$ A:B→A	$(A^b)^b$ A:B→B	$(A^b)^c$ A:B→C	$(A^b)^d$ A:B→D
C	$(A^c)^a$ A:C→A	$(A^c)^b$ A:C→B	$(A^c)^c$ A:C→C	$(A^c)^d$ A:C→D
D	$(A^d)^a$ A:D→A	$(A^d)^b$ A:D→B	$(A^d)^c$ A:D→C	$(A^d)^d$ A:D→D

図 2-1 コミュニケーションのマトリックス

Aはワタシ、Bはアナタ、Cはカレ、Dはダレカである。タテの列は「語る人」、ヨコの行は「聞く人」、左上端のコマは「話題の人」を表わす。たとえば、2行3列目のセルは、A（ワタシ）についてB（アナタ）がC（カレ）に語る、というコミュニケーションに対応する。これを記号 $(A^b)^c$ で、式A:B→Cで表現する。

左のタテの列には、語る主体をA（ワタシ）、B（アナタ）、C（カレ）、D（ダレカ）の順で配列する。右のヨコの行には、その話を聞く人つまり語られる相手を、A（ワタシ）、B（アナタ）、C（カレ）、D（ダレカ）という同じ順序で、ヨコに配列する。このヨコの行は、語りの「対象」ではなく、語りがとどけられる「場所」であることに注意されたい。「対象」つまり話題となるソシオンは、このばあい、左最上部の欄外に記されている「A」である。「語る人」（＝主体）の位置するタテの列を話す「口」とすると、「聞く人」（＝場所）の位置するヨコの行は「耳」に相当する、と考えるとわかりやすい。語られる「話題の人」は「体」である。

ワタシ A がワタシ A について他者 B に語る、というコミュニケーションの動作を、 $A:A \rightarrow B$  と表記する。ワタシ A についてアナタ B がカレ C に語る、という場合は、 $A:B \rightarrow C$  となる。

A	A	B	C	D
A	$A:A \rightarrow A$	$A:A \rightarrow B$	$A:A \rightarrow C$	$A:A \rightarrow D$
B	$A:B \rightarrow A$	$A:B \rightarrow B$	$A:B \rightarrow C$	$A:B \rightarrow D$
C	$A:C \rightarrow A$	$A:C \rightarrow B$	$A:C \rightarrow C$	$A:C \rightarrow D$
D	$A:D \rightarrow A$	$A:D \rightarrow B$	$A:D \rightarrow C$	$A:D \rightarrow D$

図2-2a ワタシの物語

B	A	B	C	D
A	$B:A \rightarrow A$	$B:A \rightarrow B$	$B:A \rightarrow C$	$B:A \rightarrow D$
B	$B:B \rightarrow A$	$B:B \rightarrow B$	$B:B \rightarrow C$	$B:B \rightarrow D$
C	$B:C \rightarrow A$	$B:C \rightarrow B$	$B:C \rightarrow C$	$B:C \rightarrow D$
D	$B:D \rightarrow A$	$B:D \rightarrow B$	$B:D \rightarrow C$	$B:D \rightarrow D$

図2-2b アナタの物語

C	A	B	C	D
A	$C:A \rightarrow A$	$C:A \rightarrow B$	$C:A \rightarrow C$	$C:A \rightarrow D$
B	$C:B \rightarrow A$	$C:B \rightarrow B$	$C:B \rightarrow C$	$C:B \rightarrow D$
C	$C:C \rightarrow A$	$C:C \rightarrow B$	$C:C \rightarrow C$	$C:C \rightarrow D$
D	$C:D \rightarrow A$	$C:D \rightarrow B$	$C:D \rightarrow C$	$C:D \rightarrow D$

図2-2c カレの物語

D	A	B	C	D
A	$D:A \rightarrow A$	$D:A \rightarrow B$	$D:A \rightarrow C$	$D:A \rightarrow D$
B	$D:B \rightarrow A$	$D:B \rightarrow B$	$D:B \rightarrow C$	$D:B \rightarrow D$
C	$D:C \rightarrow A$	$D:C \rightarrow B$	$D:C \rightarrow C$	$D:C \rightarrow D$
D	$D:D \rightarrow A$	$D:D \rightarrow B$	$D:D \rightarrow C$	$D:D \rightarrow D$

図2-2d ダレカの物語

図 2-2 4枚のマトリックス

タテの列は「語る人」、ヨコの行は「聞く人」、左上端のコマは「話題の人」。

A、B、C、D がそれぞれについて語りあうとすると、「話題の人」となるソシオンごとに4枚のマトリックスが構成される。図2-2 にその記号式バージョンを示した。なお、話題になりうる人（あるいは事象）を一括して X とおくと、このマトリックスをめぐる議論をコミュニケーション一般へと拡張することができる<sup>3)</sup>。

3) 両宮はこの X をイシューソシオン issue socion と呼んだ(両宮1993)。A を X とおいて一般化してしまうと、簡略化できるが、鏡像を相互に操作しあうソシオンの荷重ネットワークのコミュニケーションをイメージしにくくなるデメリットがある。鏡像のゲームを伴わないコミュニケーションの一般モデルは、「荷重コミュニケーションの多重媒介モデル」としてつづいて発表される。  
ちなみに、図2-3の人称別の「入れ子式図形表記法」は、はじめ使用していたカッコつきのアルファベット表記法(A<sup>3)</sup>)を工夫したものである。カッコ表記では、「話題」となるソシオンが大文字で表記され、その対象について「話している人」がまずその右肩に小さな添字で乗る。ついで「聞いている人」が、それらを含ったそのカッコの右肩に添字としてさらに乗る。開発された媒介コミュニケーションの表記法はしたがって「図形表記」と「式表記」、そして「添字つきカッコ表記」の3種類になる。わかりやすさや論理性など、それぞれにメリットがあるので、適宜使い分けることにしたい。

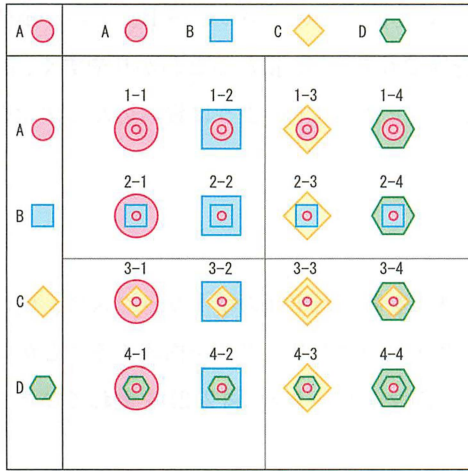


図 2-3 a アイコンのマトリックス

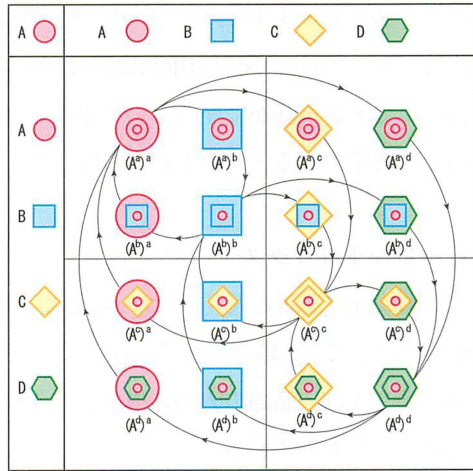
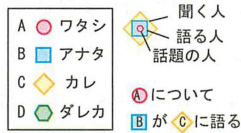


図 2-3 b コミュニケーションの流れ



丸はワタシA、四角はアナタB、菱形はカレC、六角形はダレカDを表わす。重ね図の中心は「話題の人」(体)、それを囲む2番目の図形が「語る人」(口)、一番外側の図形が「聞く人」(耳)である。

## 2-2. 図形のマトリックス

図 2-3 は、わかりやすさのために、A、B、C、D の 4 個のソシオンを丸、四角、菱形、六角形の 4 種の図形で表わし、くり込み関係を図形の入れ子のかたちで表現したものである。

中心に「話題」のソシオンをおいて、「誰が」語るのか、と「誰に」語るのか、を入れ子式にたたみ込んで表わしたものがマトリックスの各セルに描かれた重ね図である。中心に描かれたちいさな図形が、「話題」になっている人、語り草、うわさの人(本稿ではワタシ A) を表わし、二番目の図形は「語る人」、大雑把に言えば語る「主体」を示している。入れ子の一番外側の図形は、その人に向かって語られる「場所」を示している。丸はワタシ A、四角はアナタ B、菱形はカレ C、六角形はダレカ D を表わす。表記は、誰に語られるかその場所(聞き手)と語り手と話題の内包関係を視覚的に一目瞭然なかたちで表わすことができるのがメリットである。たとえば、1 行 2 列目のセル(1-2)は、いちばん外の四角であるアナタ B に対して、二番目の図形丸のワタシ A が、真中の図形であるワタシ A について語る、というコミュニケーション A : A → B のパターンを表わしている。もうひとつ例をしめすと、同じ 2 列目の 2 つ下ったセル(3-2)では、菱形で表わされるカレ C

が四角であるアナタ B に丸であるワタシ A について語っている  $A:C \rightarrow B$ 、という事情が表現されている<sup>4)</sup>。図形の重ね表記は、一見奇異でもあるが、慣れるとわかりやすく、誰かについて誰かが誰かに語るという事態をひとつのモノ・コトのように畳み込んで次元を圧縮して表象できるメリットがある<sup>5)</sup>。

### 2-3. 3Dマトリックス

タテの次元に「語る人」、ヨコの次元に「聞く人」を置いた平面のマトリックスに、奥行き次元として「話題の人」<sup>6)</sup>を加えることで、3次元のマトリックスを構成することができる。図2-4は、話題の人別に構成した4枚の平面マトリックス(図2-2)を重ねてひとつの立体にしたものである。

この3Dモデルから、誰が誰について誰に語るか、というコミュニケーションの構造を一挙に直感的に把握することができる。一瞥して、それぞれソシオン(社会的な存在である人間と集団)がいかにネットワークに内在した存在であるか、というよりプロセスつまり関係の動作そのものであるか、を見てとることができよう。図2-4 a、b、cのスライスは、ソシオネットにおけるワタシという存在の次元を切り出したもので、その切り口は社会的構成体としての「人間」がそなえている3つの次元つまり「語る私」「聞く私」「語られる私」をそれぞれ表現している。

#### 語る人

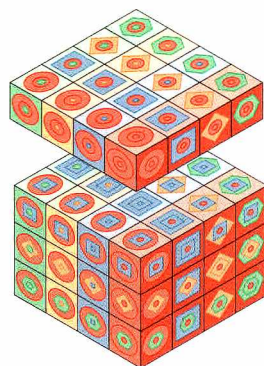
まず、上部の平面を構成する1行目のマトリックス2-4 aは、「語る者」としてのワタシに注目してAのコミュニケーションを切り出したもので、話好きのワタシAのすべての「おしゃべり」(発話)を網羅している。「口」としてのワタシの活動の総集成がこれである、といえる。その下のスライスは上から順にアナタBの口、カレCの口、ダレカDの口からでる発話の集成をそれぞれ表わしている。

4) この図形マトリックスでは、見ている人と語っている人を区別していない。語る人は自分の意見を話すとは仮定して、話題の人と、語る人とのあいだの本来あるべきもうひとつの図形=「見る人」の図形を省略している。「CさんがAさんのことを素敵な人だと言っていましたよ」などと、Bが他人の話や意見つまり伝聞をAに伝える2段の媒介コミュニケーションでは、中心の「話題の人」をかこむ2つ目の図形が、Aを見てその「鏡像」を宿している人(Aについての意見をもっている人)となる。式表示ではこれは  $A^c: B \rightarrow A$  となって、Aの肩に乗った添字のcがAを見ている人を表わす。92頁の図6-1を参照。

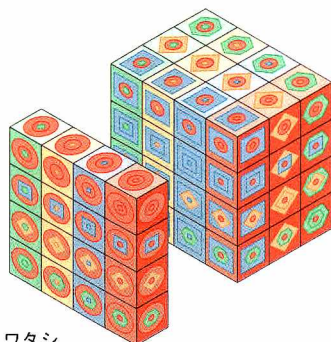
5) 自己と他者がたがいの像をくり込みあうことで無限反射のトラップにはまりかけたR.D.レインのモデル(87頁注90)なども、このマトリックス上でゆっくりと考えながら議論を整理していくことができそうである。

6) ネットワークのなかで、話題となるのはワタシAだけではない。じっさいには、アナタB、カレC、ダレカDすべてのソシオンが話題となりうる。本稿は1人称ワタシAの「鏡像をめぐるコミュニケーション」を主題的に論じる。アナタB、カレC、ダレカDが「話題の人」となるコミュニケーションについてはまた次の稿でとりあげる。ワタシがアナタやカレの鏡像をもてあそぶ(たとえばイジメッコや加害者になる)場合もふくめて、ネットワークにおけるコミュニケーション・モードと関連づけて考察する予定である。

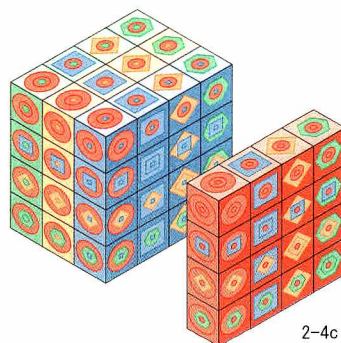




2-4a 語るワタシ



2-4b 聞くワタシ



2-4c 話題のワタシ

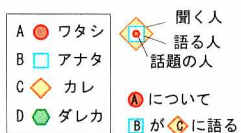


図 2-4 3Dマトリックス

A(ワタシ●)、B(アナタ□)、C(カレ◇)、D(ダレカ●)のコミュニケーション・マトリックス。タテ(y)が「話す人」(口)、ヨコ(x)が「聞く人」(耳)、奥行き(z)が「話題の人」(体)。2-4aは「語るワタシ」の集合、2-4bは「聞くワタシ」の集合、2-4cは「話題のワタシ」集合。

## 聞く人

その下の図2-4bは、語りかけられる者としてのワタシAに注目してキューブを奥にタテ方向で切ったもので、切り出された左側面のスライスには、ワタシの「耳」に届くネットワーク上のすべての「おしゃべり」（うわさや情報）が網羅されている。それぞれのソシオンが持っている「聞く耳」すべてを集成したスライスである。左から順に、ワタシAの耳、アナタBの耳、カレCの耳、ダレカDの耳となる。

## 話題の人

2-4cは、キューブを正面と平行にタテに切ったもので、手前のスライスにワタシAが「話の種」となっているすべての会話が含まれている。本稿がこれから扱おうとしているマトリックスがまさにこれで、ワタシAをめぐるすべての「うわさ」や「コメント」がこの図式にふくまれることになる。手前から2枚目のマトリックスは、アナタBの像と評価（荷重）をめぐる社会的コミュニケーションのマトリックスを表わしている。3枚目はカレCの像と評価、4枚目はダレカDの像と荷重をめぐるコミュニケーションのマトリックスをそれぞれ表わしている。

## 聞く主体

キューブの3つの次元は、それぞれネットワークにおける社会的な存在としてのソシオンの機能モード（語る口、聞く耳、見られる体）に対応している。ソシオンの荷重コミュニケーションにおいては、「語る人」（＝口）だけが「主体」であるのではない。しづかに他者の語りに耳をかたむけると、その聞く「耳」は、メッセージに選択的に荷重してリアリティを付与するゲート＝門としての重要な機能を担っている。しばしば「口」が「主体」として概念されやすいが、じつは、「耳」にもりっぱな主体性がある<sup>7)</sup>、と見るべきで

7) 西田幾多郎（西田1911）など日本の独創的な哲学者が、「世界」が現成する「場所」としての「自己」の存在を論じてきたのは、コミュニケーションの原理的な構造からいえば当然であり、神秘的どころか反対に極めて合理的な洞察を表現している可能性がある。語りに耳を傾ける者の荷重場こそ、デキゴトつまり世界がリアルに現成するその「場所」であるからだ。ヨーロッパ系の存在論や哲学的探求が独我論の袋小路に迷い込んだ主因は、おそらく、語り手だけを「主体」としてとらえ、語りかける相手（それはもちろん「人間」である！）を単なる「対象」あるいは「客体」と捉えたところにある。ちなみに、「聞く」ことの能動性（と「主体性」）に注目したのは、親鸞とその思想的後継者たちであった。今日でも「聞く」は真宗の教学において重要な位置を占めているようである。ちなみに、孤高の哲人小林勝次郎はつぎのように書き残している。「人に聞かせるでもない 自分が聞くでもない 人に語るでもない 二人以上集まって話しているうちに 必ずとも コトバは 自分のなかにある自分のことを聞くのだった。しかも慈しみ温かくさわらせてくれるハタラクはコトバである」（木村・小林1999：129）。他に木村敏（木村1990）や最近では、鷲田清一（鷲田1999）が参考になろう。

本稿が提示する3項図式、つまり、語る人と聞く人と話題の人の3項で構成される3次元マトリックスも、主体-客体2分法の呪縛を解いて、コミュニケーションについて理論的に思考する道具としてそれなりの有効性をもつかもしれない。

ある。口・耳・体の3つが一体となって構成するコミュニケーションの超個体的ループの運動にこそ、社会的存在としてのワタシの本体がある。沈黙や途絶をふくむこのループの循環運動のなかに、個体の自己回帰を超えた「人-間」の存在と意識のダイナミックスが書き込まれている<sup>8)</sup>。「聞く耳」は、そのループの荷重変換動作において枢要な機能を果たしていることがこれから示されるだろう。

人間は個体ではなく、個人ですらない。信頼と不信によって結ばれながら、さまざまな鏡像をかざしあうことで自己組織化し、あるいは自己崩壊していく荷重ネットワークの超個体的なループの集合、それが「人間」とよばれる社会的生命体の実体である。キューブはその総体をわかりやすく記述することで、正確な思考を促進するための工夫である。以下、その解明にむかって、まずネットワークのコミュニケーション動作をモード別に検討したい。

### 3. 人称モードとメディア

メディアは、単に鏡像を載せてネットワークを周回する情報の媒体であるだけではない。メディアは存在の媒質であり、メディアの特性によってリアリティの様相そのものが変質する。

ソシオンのコミュニケーションは、人称のモードにほぼ対応して4種のメディアを類別できる。ワタシの鏡像や他者たちの存在(表象×荷重)は、それぞれのメディアに特有のプレゼンスをもってネットワークの回廊を運ばれる。図4-1にその様子を簡単に示した。声はBモードの回廊の主要なメディアであり、文字はCモードで重要なメディアである。Dモードは、うわさの回廊である。

#### 3-1. Aモードのメディア

ワタシAがワタシAに語るコミュニケーションのメディアをAモードのメディアとよぶ。このAモード(1人称)のコミュニケーションを可能にするメディアとしては、言語(内言)がなによりも重要である。ひとり言をはじめ、日記、作文、自分史などを可能に

8) ワタシの「口」領域は、カッコつきの語る「主体」としての「ワタシの世界」を、ワタシの「耳」は「他者の世界」を、ワタシの「体」は「世界のワタシ」をそれぞれネットワークのなかで実現している、といえよう。ちなみに、このキューブマトリックスは、口、耳、体の3次元でつくられているが、後に述べるように、本来はこれにもうひとつ「目」つまり「見ている人」の次元をつけくわえる必要がある。見る人と語る人をループでつないで同一とみなすことで、4つの次元を3つの要素に圧縮して簡略化したものがこの3Dマトリックスである。



た映像性のハイテクメディアが、ワシという固有の（というより差異化された）表象を形成して、それにそれなりに荷重（記憶と予期）することで、人生という「物語」をワシ自身に語る恰好のメディアとなっている、と考えられる。

### 3-2. Bモードのメディア

ワシ A とアナタ B は、「対話」という対称変換をともなうコミュニケーションによって連結される。簡単に、この対話的コミュニケーションを B モードとよぶ。アイコンタクトから、相づち、素振りや顔の表情、とくにそこに浮かぶ笑いや微笑など豊富なノンバーバルメディアが活用される。告白や抱擁、さしのべる手あるいは拳骨なども B モードのメディアと言っていいだろう。アナタとの会話がたんなる演説に終わらないのは、ワシの「呼びかけ」に対してアナタが「相づち」を打つからである。信頼するアナタのうなづき、肯定的な相づちは、ワシの問いかけに荷重を備給してリアルにする。逆にアナタの否定は、備給を揺るがしてワシの見方に水をさし、リアリティの再検討をせまる。

ワシは、基本的にワシについて他者に語ること、そして他者のうなづきを得ることによってはじめて、自分をリアルなものとして構成する。つまり自己の存在(表象×荷重)の妥当性を共同主観的に確認するのである。ちなみに、神田橋條治によれば、精神科の面接療法においてもっとも重要なコトバは「ホウ！」という「相づち」（の豊かさとおそらくタイミング）である<sup>10)</sup>。

### 3-3. Cモードのメディア

アナタ B の語りをつうじてワシ A に現前する他者 C をカレとよぶ。カレとのあいだには（定義上）アナタが介在するので、ワシ A はカレ C と直接「会話」を交わすことができない。ふつうは、アナタからの紹介や伝言、うわさなどをつうじて間接的＝媒介的にカレとコミュニケーションすることができるだけである。このとき、ワシに現前するカレの

10) 日本でその面接療法がもっとも信頼されている精神科医のひとりである神田橋條治は、このホウの相づちを何種類も使いこなすために、テレビを見ながら特訓した、という（神田橋 1984、中井 1992）。

そういえば、60年代に真空管のコンピュータでカウンセリングをするプログラムがつけられたことがあった。ELIZA と名づけられたこのコンピュータは、クライアント（患者）の質問を、オウム返ししながら（タイプライターで！）相づちを打つというものであったらしい（Weizenbaum 1966）。おもしろいことに、カウンセラーがコンピュータであることに気づかなかった患者には改善がみられた、と報告されている。

当然のことだが、声と顔は、今も人類にとって、なによりも身近な B モードの要素メディアである。親しげによびかけるラジオのパーソナリティや、笑顔をふりまく TV キャスターたちも、この B モードの対話者として、視聴者であるおおくのワシ A に現前する。その親しさの幻想と信頼荷重のもつ影響力は、コミュニティの隣人よりもはるかに大きいといっていだろう。

リアリティは、アナタへの信頼度の関数となる<sup>11)</sup>。たとえば子ども A のアナタ B への信頼が高ければ、サンタクロース C は実在し、乏しければ実在性は疑われる。ネットワークにおいて、アナタはカレのメディアであり、アナタへよせるワタシの信頼はカレのリアリティを運ぶ文字通りの媒質である。

文字というメディアの発明は、声の届く範囲をこえて、直接カレ C とカップリングすることを可能にした。書置き、証文、手形の類から書簡・信書、書物といったメディアは、対面するアナタ B をとび超えて、カレ C の存在と思考を直接ワタシのもとに運ぶ<sup>12)</sup>ことで、ネットワークの連結位相を変更した、といっても過言ではない。

さらに字や文章といった書かれたメディアによるコミュニケーションは、話し言葉によるリアルタイムの会話とちがって、時間にたいして情報を保存する。このタイムラグが、言葉を選択したり、反芻することを可能にし、その分思考の自律と内面の発生を促した<sup>13)</sup>、と考えられる。実際、よく知られているように、文字の発明と、世界の大思想（ギリシャのアカデミア、中国の諸子百家）の発生は、時期を同じくしている。

### 3-4. D モードのメディア

誰か忘れたけどこう言っていた、とアナタがワタシに語るとき、ワタシにはアクセスできない他者がネットワークに出現する。いわゆる世間の「うわさ」、小耳にはさむ他人のコトバは、まさにこの D モードの他者を現前させるメディウムである。

他に身近なものとしては、たとえば机の上や黒板の落書き、家の前に置かれた花束や、知らない人と交わす会釈、さらには広場でのざわめきなども、こちらからだれか特定して呼びかけることのできないという点で D モードのコミュニケーション・メディアである<sup>14)</sup>。

- 
- 11) カレ C のリアリティ<sup>a</sup> がワタシ A のアナタ B への信頼<sup>B<sup>a</sup></sup> によって増幅される（あるいは不信によって減衰される）、という点が、ソシオン・ネットワークにおける荷重コミュニケーションのポイントである。
- 12) 文字は、声のように「場」の荷重を吸わずに、対象から距離をとりやすくするという重要な特徴をもつ（Ong 1982）。めいめいで聖書を手にしたプロテスタントたちは、印刷されたコトバをたどりながら、神との内なる会話を重ねることで、内面をみつめて思考するワタシの存在性を獲得し、自律性を形成していった、と考えられる（Weber 1920）。しかし、教会の聖堂にひびく朗読の声や、キリストのアイコンは、「神」とよばれる他者性（の予期ポテンシャル）をアナタとして現前させる有効なメディアであることにはかわりはない。
- 13) ここでも、カレのコトバつまり書かれた文字の「真実性」は、媒介したアナタ B への信頼荷重によって媒介される、という媒介増幅原理がはたらくことにはかわりはない。手紙を運んできた配達者の「信用」や、文章を編集した編者や出版社の「権威」こそが、書かれたもの、出版されたもの（つまり「本」）の真実性・リアリティを保証する荷重の源泉である。権威を鶏呑みにした読み手には、その事情はしばしば意識されない、という点が理論的に興味深い。「無意識」とは、本来欲動よりも、コミュニケーションの媒質そのもの、つまり荷重それ自体を指す、と見るべきかもしれない。
- 14) ちなみに、友人や知人のネットワーク研究（Boissovain 1974）が明らかにしたように、アナタ B からカレ C へと、順繰りにたどっていくと、いずれそのダレカ D と「面会」することもできなくはない（アナタとカレ、カレとダレカのあいだに不信やウソによる断絶がなければの話だが）。この場合、ワタシがカレに会うその時点で、（位相の定義上）カレはアナタのモードに、ダレカはカレのモードに順繰りにシフトしている。

どこのダレかわからない他者 D は、アナタを介してアクセスできる 3 人称のカレ<sup>15)</sup> よりも遠い位置に定位するのが普通である。しかし、時にはアナタよりも身近な場所に現前することがある。不意に向こう側から現れて驚かすが、呼びかけようとするれば姿をかくす、そのようなダレカ D は、密かにモードの壁をすり抜ける一種の「流動体」のような存在(の気配)であり、その分、係留点(能記/シニフィアン)をもとめて荷重がネットワーク上に流れ出しやすい、と考えられる。D モードの回廊は、ポジティブ、ネガティブを問わず、他者性の跳梁(予期ポテンシャルのうねり)が発生しやすい危険な領域であるといえる。

表 1 モードとメディア

モード	メディア	特性
Aモード (A=A)	鏡 自画像 氏名 内語 日記	回帰性 自己意識 舞い上がり 落ち込み
Bモード (A=B)	話ことば あいづち 身振り 目 声 表情 笑い	対話 対称変換 備給の相互調整(裏打ち)
Cモード (A=C)	伝言 文字 手紙 書物 証文 通達 遺言	媒介増幅 タイムラグ 解釈 引用
Dモード (A=D)	落書き 壁の耳 障子の目 無言電話 投石 投書	風聞 うわさ 評判 うねり 熱狂 パニック

A モードはワタシ(1 人称)、B モードはアナタ(2 人称)、C モードはカレ(3 人称)、D モードはダレカ(4 人称)のメディア

以上、ワタシ、アナタ、カレ、ダレカの 4 つのモード別に、コミュニケーションとメディアの関係を概観した。表 1 はそれぞれの特性を簡単な一覧表にしたものである<sup>16)</sup>。

15) ネットワークの位相においてもっとも外部に位置するこの他者性 D が、名づけられることもなく高荷重状態でワタシ A の内部に直接現れるとき、ワタシと他者(性)とのインターフェイスが相当なリスクにさらされるだろう、ということは容易に推測できる。このインターフェイスの混乱から、「妄想的他者」(木村敏 1975)の出現へはほんの一步であるようにおもわれる。もしかしたら、「ファントム短縮」(安永 1970)による「荷重備給速度の遅延」から、今なお人類の最大の謎のひとつである精神分裂病の発症を合理的に説明することが可能となるかもしれない。備給の遅延によって、「話す」と「聞く」の「タイミング」(木村敏 1990)の逆転がおこる、と想定できるからである。その結果、自己と他者が、内部と外部が反転することになるが、そのメカニズムについてはまた機会を改めて論じる。

16) それぞれのモードの呼称つまり人称は、単数(ひとり)なのか複数(集合的)なのかでさらに区別されるし、同じ人称モードでも関係の特性によって呼称や語法に興味深い違いが見られる。たとえば、アカデミズムの世界では、ひとりで書いた論文を「われわれは……」と書き出す不思議な風習があるし、英語圏ではアナタはアナタたちとおなじ you で区別されない。ちなみに、先生や講師が「皆さん」と壇上から呼びかけるときも、その呼びかける他者がワタシをまなざすアナタ(たち)なのか、そのその人と限定できるカレ(ら)なのか、誰でもないダレカなのか、場の種類や講演者の力量によっていろいろでありうる。  
対称性のつよい会話でも、ワタシとアナタ、君と僕、俺と貴様、ソチラとコチラ、そしてなによりも有名なオタクといったように、とくに日本語は豊かな語法が存在する。敬語の問題は別にして、ソチラとコチラという対称変換を含む語法の存在が、本稿にはとくに示唆的である。山のアナタの空遠く、という句からも推測されるように、アナタは古代にはワタシの「彼方=向こう側」として呼びかけられたのかもしれない。

### 3-5. モードの倒錯

メディアのテクノロジーは、ワタシの鏡像はもちろん、他者の現れ方とその体験の様式、生きられる人間の「リアリティ」までおおきく変化させる。

文字は、文章に書き残されることで、死んだ人の「遺言」はもとより、存在しなかった人の伝説までふくめて、他者の表象と荷重を、さらにその内面の「思考」を、時空を超えてワタシに直接現前させる人類最初のメディアであった。「手紙」は人から人へ選択的に移動し、「書物」は手にとったすべての人に向けて時を超えて編まれた文章を伝える。

ネットワークをバリアフリーに移動するこれらのメディアが人類の文明に与えた影響ははかりしれない。とくに、グーテンベルグの発明以降、ほとんどの「書物」が、アナタ B からカレ C、そしてダレカ D へとモードの壁をこえて送りとどけられることが可能になった。聖書の「出版」が、神の言葉と教義の真理性を教会と司祭の権威から切断して「プロテスタント」を生み出したことはよく知られている (McLuhan 1962)。

その後も、録音や写真、映画、放送といったメディア技術の発達他者の「現前モード」に、したがって「文明」のあり方に大きな影響をおよぼしつづけている。ベトナム戦争では、戦場にもちこまれたテレビカメラが茶の間のテレビに死者を「現前」させ、全世界的に「反戦運動」を激化させたし、北京の天安門事件では「人民解放軍」の「民衆弾圧」を記録した旅行者の小型ビデオの映像が東側諸国の体制を震撼させて冷戦終結のキッカケをつくった。イランではパリからもちこまれた亡命指導者の講話テープがひそかにダビングされて国民に広まり、原理主義者をふるい立たせて「イスラム革命」をひき起こしたともいわれる。

そしていま、インターネットの発達によって、書かれた文章がリアルタイムで交換される文字会話が日常的に可能になった。あたらしい電子メディアは、「Eメール」や「チャット」など、未だ人類の知らなかった「他者性」のモード、あたらしい他者の存在と経験のカテゴリーを生み出しつつある<sup>17)</sup>。アナタをカレ化したりダレカをアナタ化したりするその力が文明と人類に与える衝撃は、はやくも自明性の影に隠れつつあるが、「文字」と「活版印刷」の発明に勝るとも劣らないだろう。

メディアと他者性のモードをめぐるのはマクロ-ミクロを問わず興味がつきないが、ここでは問題の所在を確認しただけで、つぎの課題にすすもう。

17) 誰かわからない匿名のアナタ、「オオカミ」でもありうるダレカ D と、ワタシのたいせつな想いを備給するかけがえない存在であるアナタ B の融合体、これが「出会い系」と呼ばれるケータイ・メディアによって出現した新しいモードの「他者性」である。誰でもいいダレカとのリアルタイムの声あるいは文字の文信が、かけがえないアナタの幻覚を生み出し、呼応のシンクロニティが現実の他者の相づちよりもリアルにワタシを備給する。



## 4. 鏡像のマトリックスとワタシの「物語」

ふたたび、平面マトリックス(図2-1と図2-3)にもどっていただきたい。このマトリックスは、3次元の図2-4cで示したように、「話題の人」を1人称のワタシAに限定して、キューブから切り出したものである。ワタシA、アナタB、カレC、ダレカDの4者の間で交わされる「ワタシAをめぐる会話」のすべてのモードがこれら16個のセルに論理上内蔵されている。ワタシAをめぐるマトリックスの各セルについて、すこし具体例をあげながら、順に説明しよう。

### 4-1. ワタシが語る

#### 1-1 ワタシがワタシについてワタシに語る ( $A^a : A \rightarrow A$ )

まず、語る主体がワタシAであるコミュニケーションからみてみよう。マトリックスの最上部でヨコにならぶ4つのセルである。左上の1-1、1行1列目は、ワタシAがワタシ自身に語るコミュニケーション  $A^a : A \rightarrow A$  である。1人称のワタシAはひとりで自由にワタシに語りかけることができる。ブツブツとひとり言でもいいし、誰にも聞こえない内語でも、あるいは日記でもいい。ワタシからワタシへのこの自己回帰性のコミュニケーションには、何を語ったかは他人に聞かなくてもわかる、と同時に、他人に聞かれることはない、という特徴がある。同じ丸の重なりが、この自己回帰ループの透明性と保存性をしめしている。聞かれることがなければ、取り消すことができるが、リアルにならない。備給が確定されず、保留状態におかれることが、内面の自由度を生む、と考えられる<sup>18)</sup>。

一般に、自己回帰性のループは、荷重(ポテンシャル)の増幅あるいは減衰機能をもつ。マイクがスピーカーの音をひろってアンプがそれを自己増幅するのはその一例である。1-1のAモードのコミュニケーションでは、ワタシがワタシにワタシについて語る＝想ううちに、語られる＝想われるワタシの荷重つまり自己への信頼や不安感が、増幅されてどんどんふくらんだり(誇大感)、減衰したり(自己嫌悪、自信喪失)する、という重要な現象が発生する。アナタの「そうそう!」といううなづきと、「イヤちがう!」という否定は、この自己回帰による暴走を止めたり励ましたりする上で、後にもふれるように、決定的な機能を果たしている。

18) 「ひとり言」が誰かに聞かれていたことを知ったときは恥ずかしい。内面の自由度と視線の力の「指向のくい違い」が「羞恥」を生む。詳細は作田1967、木村1999などを参照。

### 1-2 ワタシがワタシについてアナタに語る (A<sup>a</sup>: A → B)

1-2はワタシAがワタシAについてアナタBに語る、というコミュニケーションA<sup>a</sup>: A → Bのセルである。ワタシが見たワタシの存在をリアリティとして経験するには、それを誰か他者に聞いてもらう、知ってもらふ必要がある。ワタシが信頼をよせるアナタのうなづきは、ワタシの言葉を備給して、ワタシの物語をリアルにする。「あのね、ほくね、」と母に語りかける子どもの自慢は、「あら、そう!」と母がうなづいてくれることでリアルとなる。それは、自慢話と、受難の物語の別を問わない。聞いてくれるアナタBは、語るワタシAの保証人である。

ちなみに、母にしつこく話しかける子どもは、しばしば話題をもっていない。話題をさがし、選び、母に向かって語りだす子どもは、信頼する母アナタに聞いてもらうことをつうじて、「語る主体としてのワタシの機能」<sup>19)</sup>を形成する。1-2のセルはワタシの話に耳を傾けてくれるアナタの場所であり、ワタシが語る主体としてのワタシの主体性を形成する場所でもある。

### 1-3 ワタシがワタシについてカレに語る (A<sup>a</sup>: A → C)

1-3はワタシがワタシについて、アナタではなくカレに語るセルである。アナタとちがって、カレとはリアルタイムの双方向的な応答が期待できない。ネットワークの位相に沿えば、アナタを通じてカレに伝言を頼むことになる。そのばあい、あとで主題的に検討するように、アナタの媒介によって情報伝達にバイアス(荷重の増幅作用)が発生する。媒介にともなうこの荷重ノイズを減らすには、「信書」を託すのが一般的だろう。この場合は、当然文字と紙が発明されていなければならない。ほかに、伝言板などによる連絡や留守の書置き、さらに遺書などもこのCモードのコミュニケーションの一例としてあげることができる。

カレを非対称性という点で定義すれば、ワタシが「面接試験」で目の前にいる試験官に

19) また、ラカン「他者とは、〈私〉、つまり聞き手と話している〈私〉が構成される場である」とも語っている(Lacan 1981=1987:198)。寝椅子の上に姿をかくす精神分析医やカウンセラーのみならず、学会で研究発表に集まった聴衆や、飲み屋で隣り合った客から取調べ室の刑事まで、ワタシの物語に耳を傾けてくれる他者は、語られるワタシのリアリティを確認してくれると同時に、語る主体としてのワタシの機能を回復してくれる貴重なアナタの場所である。おそらく、その「場所」へ備給された荷重(「基本的信頼」)こそ、ワタシたちすべての人間のリアリティの「母胎」なのだ(注41も参照)。

ちなみに、主体はアルもの・ことについて語らない自由と同時に、ナイもの・ことについて語る自由をもつ。ワタシがつくりあげた「存在しない私の物語」を他者がうなづきながら耳を傾けてくれたとき、語る主体ワタシはリアルに構成されるが、語られるワタシ(ミードのme)は、ワタシの内部では荷重をもたない虚の表象として存在するにすぎない。ここに、内部に虚をもつ人が強迫的に語りつづけなければならない必要が生まれる。ウソは、「嘘つき」という人格の問題であるより以前に、虚を裏として備給することを許した他者の問題であり、その関係性をたたみ込んだまま回転するループの問題である、といえよう。この問題をめぐっては、別の論文で池信がAC(アダルト・ナルドレン)の虐待の物語などと関連して展開する予定である。

自己紹介をしたり、その筋から「取調べ」をうけて弁明したりするのも、この1-3のコミュニケーション  $A^a: A \rightarrow C$  の一種とみることができる。そうした場面では、直に対面していても勝手に問いかけたりしてはならないことがおおい。取調官に質問をすれば、「聞かれたことにだけ答えなさい」と叱られるのが落ちだろう<sup>20)</sup>。このときのアナタは、カレのモードでワタシの前に現れている、といえる。のちにふれるように、権力はまさにこの偽装モードを活用する。

#### 1-4 ワタシがワタシについてダレカに語る ( $A^a: A \rightarrow D$ )

1-4の  $A^a: A \rightarrow D$  は、ワタシが、特定のカレ  $C$  ではなく誰かわからないダレカ  $D$  にたいして、ワタシについて語るというコミュニケーションのセルである。通行人に向かって駅前広場で声をはりあげて演説しているとき、ワタシ  $A$  はこの  $D$  モードのコミュニケーションを行っている。ピンに手紙をいれて海に流すばあいも、ひとりのダレカに向けられた同じ  $D$  モードのコミュニケーションといえよう。「出会い系」の携帯電話やパソコンでどこかの誰かわからないダレカ  $D$  にメールを「打つ」ときも、あきらかに  $D$  モードである。ワタシが呼びかける他者が、ダレカ限定できない、しかし限りなくパーソナルであるような不思議な他者性として現前しているという点で、興味深い<sup>21)</sup>。呼びかけるダレカが集会的か、パーソナルかという点の違い、反応までのタイムラグ、そして応答への期待値の大きさなどが異なっているという問題をのぞけば、これらはすべて不特定の他者に向けたワタシのダイレクト・コミュニケーションである。

他に、媒介によるコミュニケーションとして、アナタやカレに依頼して、ダレカにワタシの宣伝をしてもらう、という広報・PR型のコミュニケーションが考えられる。ワタシの失敗や罪をアナタに告白して、誰でもいいダレカつまりミンナに伝えてもらう、という自己暴露型も、このコミュニケーションの変種としてあげていいたいだろう<sup>22)</sup>。

---

20) この非対称性こそ、「権力」とよばれる他者性の本質である、と考えられる。82頁の「媒介と権力」を参照。

21) このコミュニケーションが成立するためには、ワタシを匿名のダレカにとどけるもの、つまり新聞の投書欄や、インターネットの掲示板、広場の落書きといったメディアが必要である。注17)も参照。

22) 見て見て、誰かワタシを見て！とヌードグラビアやワイドショーにワタシ（のしばしば恥部）を露出陳列するタイプの行動などが考えられる。私小説やある種の自分史などもその同類である。ちなみに、ダレカに語るモードとワタシに語るモードのあいだにはある種の類似性あるいは親和性があるかもしれない。日記を書く人は、ダレカに読まれることを意識しているようなフシがあるし、誰も聞いていないのにダレカに向かって講義している学者（たとえば筆者）は、自分に向かって（しばしば堂々巡りの自己回帰を重ねながら）語っているようにも見える。

## 4-2. アナタが語る

### 2-1 アナタがワタシについてワタシに語る ( $A^b : B \rightarrow A$ )

2-1のセル  $A^b : B \rightarrow A$  は、アナタ B がワタシ A について思っていることをワタシ A に語る、という鏡像提示のコミュニケーションである。「君は美しい！」とささやかれたり、「バカヤロー！」と怒鳴られたりする場面などを想い浮かべることができる。この2-1のセルでアナタ B がかざすワタシの鏡像をつうじて、ワタシ A は、自己回帰 (1-1) によるワタシの像と荷重を修正しながら、人間としての自己像を社会的に形成していく。

アナタがワタシに語る時、アナタのコトバの真理性は、ワタシのアナタへの信頼の関数として決まる。アナタがワタシにいくら甘いコトバをささやいても、ワタシがアナタを信頼していなければ、そのコトバにリアリティは生じない<sup>23)</sup>。逆に、アナタを全面的に信頼していれば、そのコトバはリアルである。たとえば、敬愛する先生が「君はすばらしい優等生だ！」と鏡をかざしたなら、その鏡像は容易にワタシの自己回帰に侵入して自己像を乗っ取るだろう。また、大好きな友だちがこぞって「おまえはみにくいアヒルの子だ！」と負の鏡像をかざしつづければ、素直なワタシはそれなりのダメージを自己イメージのなかに抱え込むにちがいない。

### 2-2 アナタがワタシについてアナタに語る ( $A^b : B \rightarrow B$ )

右のセルに移ろう。これは、四角で表現したアナタ B がワタシ A についてアナタ自身 B に語る、というコミュニケーション  $A^b : B \rightarrow B$  である。このセル2-2は、ワタシ A についてのアナタ B のひとり言あるいは観察に対応している。アナタ B がお見合いの相手で、ワタシをそれとなくチラチラ見ている場面などを想像していただくとわかりやすいかもしれない。

当然、アナタがワタシをどう見ているかは、アナタの「内面」に属しているので、直接ワタシには明らかにはならない。ワタシとしては、直接自分をどう思っているか問いかけるか、それができなければ、アナタが退屈そうにしているのか、いらだっているのか、楽しそうなのか、素振りや目の色、笑い声や音調などから「察する」ことができるだけであ

23) アナタ B の語るコトバ  $\Delta X^b$  のリアリティ  $\Delta X^a$  は、アナタ B へのワタシ A の信頼  $B^a$  次第で変化する ( $\Delta X^a = \Delta X^b * B^a$ )。

ちなみに、セル2-1で信頼するアナタがワタシにかざした鏡像 (私II) 「バカヤロー！」が、ワタシ自身が自分で思い込んでいるセル1-1のワタシの自己像 (私III) 「ボクは優等生だ」と矛盾しているばあい、ワタシのリアリティー (自己システム) に荷重の振動が発生する。このとき、本当のワタシとは何か、をめぐる社会的な「自己意識」が誕生する。結果的に、「バカなのは君の方だ！」と、アナタへの信頼荷重 (私I) が反転するか、それとも「ボクは確かにバカヤローだ」と、ワタシの自己荷重 (私III) が変更されることになる。77頁の議論も参照。

る。アナタがワタシについてアナタ自身に語るこのセル (2-2) は、ワタシをめぐるコミュニケーションのループつまりワタシの自己意識にとって重大な位置を占める。アナタの内面は、ワタシ A の自己システムに外部から情報とリアリティをもたらしもうひとつの自由 (the alter ego) が存在する場所だからである。ワタシのリアリティを奪うことも与えることもできるアナタの内面は、自己意識を手にしたすべての人間が、透明に知りつくすことを渴望すると同時に、知ることを恐れる不変の領域である<sup>24)</sup>。

### 2-3 アナタがワタシについてカレに語る (A<sup>b</sup>: B → C)

その右 2-3 のセル A<sup>b</sup>: B → C は、アナタ B がワタシ A についてカレ C に語るコミュニケーションである。たとえば、友だち (アナタ) が先生 (カレ) にワタシのことを告げ口する場合が該当する。ワタシのたいせつな鏡像がアナタによって「もち出され」、ワタシの手元を離れてカレやカレラのあいだを一人歩きしはじめる。カレに直接問いただしても、「何も知らないよ」とそっぽをむくかもしれないし、思わせぶりにほのめかすだけかもしれない。アナタによるワタシの鏡像の「もち出し」は、社会におけるワタシ自身の自己疎外のはじまりを意味する重要なコミュニケーションの次元である<sup>25)</sup>。調査書や内申書などは、ワタシの鏡像をもち出してカレのもとに届けるこのコミュニケーションの文書版である。

もちろん、すべてのアナタが、カレにワタシの秘密を漏らしたり、陰口をたたいたりするイヤな人とは限らない。ワタシ A の美点や善行をカレ C にこっそり伝えてくれる世話好きのやさしいアナタ B もたくさんいるだろう。いずれにしても、カレとアナタのあいだでワタシの鏡像がたらい回しにされると、媒介増幅によって荷重が増幅され、ワタシ自身も知らない尾緒がつく場合がおおい。

### 2-4 アナタがワタシについてダレカに語る (A<sup>b</sup>: B → D)

2-4 の A<sup>b</sup>: B → D は、アナタがワタシのことを第 3 者に語る、というまでは 2-3 と同じ

24) ワタシはその他者の場所 (アナタの場所、ソチラ側) を通過して自己自身に回帰するひとつの環体 (私 I、II、III のループ) であり、社会的なコミュニケーションの産物、というよりもプロセスそれ自体である、と考えられる (木村 1995)。アナタがワタシについてアナタに語るこの場所 2-2 は、ソシオンの自己システムにとって外部にありながら、私 IV とでもよぶべき重要性をもっている。

25) アナタ B は、ワタシの知らないうちにワタシ A の鏡像をカレ C やダレカ D のところへ「もち出し」て、ヒゲや傷跡などいろいろ書き加えて変身させるおそろしい自由をもっている。アナタにたいする「信頼」のなかには、ウソをつかない、というだけでなく、不当な「もち出し」の禁止に関わる信頼、つまり余計なことを他人に話さない、という次元の「信頼」がふくまれる。告げ口がきらわれるのは、この信頼に対する「裏切り」となるからである。

だが、その相手が特定の人物カレCではなく、(ワタシからみて)ダレカわからない人Dである、という点が異なっている。このちがいは案外おおきい。ワタシの秘密を知ったのがダレカわからない人物である、という点で不安が増すだけではない。ワタシの情報が流出した先がダレカわからない、ということは、誰でもそのダレカDでありうることを意味する<sup>26)</sup>。ダレカは一瞬のうちにダレモに、つまりミンナに転化する。ダレカが知っているということは、ミンナが知っている、ということに無限にちかい。漏らされた情報が他人に知られたくないものであれば、ワタシは、ダレモがそのダレカでありうるミンナを前に、戦々恐々とするだろう。しかし、逆に自慢したいプラスの情報であれば、アナタはワタシの広報担当のスポークスマンとなり、このセルは反対に最高の自己宣伝になる。

プラスのものであれマイナスのものであれ、いったんもち出されたワタシの鏡像は、アナタがダレカとつくるコミュニケーションのループにとりこまれ、「鏡像の回廊」(後出)に入ってしまうことが多い。信頼してくれている人のプライベートな情報は、とくに悪気がなくても、めったな人に話してはならない、というルールは、ワタシAからダレカDに直接対面することでみづから鏡像を訂正したり補ったりしにくい、というこの事情による。

#### 4-3. カレが語る

##### 3-1 カレがワタシについてワタシに語る (A<sup>c</sup>:C→A)

3-1のセルは、カレがワタシについてワタシに語るA<sup>c</sup>:C→Aである。アナタとワタシは対称性をもち、受け答えの往復が可能だが、ワタシとカレのあいだはそうした応答の対称性はない。

アナタが対称性を欠いたまま、ワタシについてワタシに語る、つまりコメントしたり決めつけたりするばあいを考えることができよう。医師が病状を患者に説明する場合は、このコミュニケーションの典型的なケースである<sup>27)</sup>。批評家が作家本人に読まれることを意識して批評を書く場合もこのモードがはたらいっている。このカレによる批評は、カレがアナタ(つまりコメントされるワタシ)の視線や欲望に距離をおけるその分、客観的になり

26) このとき、アナタによってワタシの鏡像に付与された荷重がプラスのポジオンなのかマイナスのネクロンなのかは、ワタシと他者性とのインターフェイスにおいて決定的な違いを生み出す。アナタがダレカにワタシの悪口を言っているとしたら、ミンナが敵意をもっているように感じやすいし、逆に褒めてくれたとするならば、ミンナがワタシに好意をもっているような気がしてくるだろう。アナタの密告や告げ口は、ひと言で「ダレカ」を「ミンナ」に変身させ信頼の世界を不信の暗闇に一変する魔法の力がある。注47)を参照

27) 精神科医のアンダーセンは、議論中の医療スタッフの様子をマジックミラーから患者に見せるという反対のコミュニケーションの流れをふくむダイナミックな精神療法の手法を開発した(McNamee & Gergen 1992)。この対話シンメトリー療法は、客観性の確保と権力への疎外(鏡像の「もち去り」)を防ぐふたつの機能をもっている、と考えられる。

うる。

さらに、放言や捨てぜりふのようなコメントなどもこの一方向的なコミュニケーションの事例としてあげることができるだろう。ワタシがアナタのコトバに応えようとしたとき、アナタはすでに横を向いている場合<sup>28)</sup>、あるいはカレのモードに変身してテレビを見ている場合などもそのケースに相当する。他に、この種のコミュニケーションの一例として宣告や判決、通信簿など、非対称的な勾配を内在するものをあげることができる。ワタシの鏡像をもって一方的にワタシの前に現れるこのコミュニケーションモードは、基本的に「権力」のモードである。

### 3-2 カレがワタシについてアナタに語る (A<sup>c</sup>: C → B)

3-2のセル A<sup>c</sup>: C → B は、カレ C がワタシ A についてアナタに語る媒介性の高いコミュニケーションである。たとえば先生 C が家にやってきて、ワタシ A の成績や進学について、あるいは不行跡について、親 B になにか話している、といった状況を考えることができる。遠い他者のほうからアナタという近い他者のもとへワタシの鏡像がいわば秘密裏に持ち込まれていることになる。ワタシの知らないワタシの鏡像が見えないままワタシの方に近づいてくるこの局面は、ワタシにとっては不安なときであろう。病室の隅で医者 C が小声でワタシ A の病状について家族 B に話しているようなときは、誰しもそのような不安を経験するにちがいない。社会の権力とでもいうべき他者の領域から、疎外された鏡像ワタシが姿を隠したまま迫ってくるおもしろい瞬間である。

のど自慢の審査員が結果をアナウンサーに手渡すとき、出演者が感じるワクワクする不安も同様である<sup>29)</sup>。先生 C が、ワタシ A のことを友人 B のまえでほめていた、ということを知ったりすると、生徒はやる気がでるだろう。これは、この種の媒介性コミュニケーションがもたらすポジティブな荷重の増幅効果である。

28) R.D. レイン (Laing 1961) その他おおくの精神科医が、分裂病患者の家族において対称性の欠落した病的なコミュニケーションのパターンが観察されることを報告している。日本の家族を対象にこの問題を追究した日本大学医学部の共同研究が参考になる (井村 1984)。

29) 「権力」(might) とはまさに、コミュニケーションによってワタシを照準した他者性の力を媒介増幅する社会-象徴的な回路装置である。ただ、その権力=カレが増幅する荷重がポジオン、ネクロンの正負両面にわたるところに注意しておきたい。つまり、何かよいことをもたらす正の予期ポテンシャルは「希望」と「期待」を生み、なにか悪いことをもたらす力、負の予期ポテンシャルは「恐怖」と「不安」を生み出す。それらが媒介によって単に増幅されるだけでなく、両極性をもって不確定にゆらぐところに、「権力」と呼ばれる他者性の力の震源がある。

3-3 カレがワタシについてカレに語る ( $A^c : C \rightarrow C$ )

3-3のセルのコミュニケーション  $A^c : C \rightarrow C$  は、カレが、ほかでもないワタシについて思いをめぐらしたり考えこんだりしている局面に相当する。先生がワタシのレポートを読みながら首をひねっているのが見えたり、医師がワタシの診察が終わったあと、ぶつぶつ言いながらなにかカルテに書き込んでいるばあいなどをイメージするとわかりやすいだろう。クラスメイトが時々コチラを見ながら何かヒソヒソと話している場合も同じで、ワタシの鏡像がワタシに開示されないまま、カレラのもとをいわば「たらい回し」にされている不安が、場合によっては期待が高まる<sup>30)</sup>。カレ(ラ)が何を知っていて、それをどう使うのか、ワタシには知らされない場合はなおさらである。第3者であるカレにワタシに関する情報の開示を求める権利<sup>31)</sup>は、鏡像の「持ち出し」による不安と自己疎外を防止する効果がある。

3-4 カレがワタシについてダレカに語る ( $A^c : C \rightarrow D$ )

この  $A^c : C \rightarrow D$  は、ワタシの情報がカレからダレカへ漏れ出すセルである。第3者によって鏡像が「もち去られる」コミュニケーションである。カレCしか知るはずのないワタシAのプライバシーが、ダレカ知らない人Dに漏れていた、というようなばあいは、カレCがダレカDにワタシAのことをしゃべったにちがいない ( $A^c : C \rightarrow D$ )、ということになる。役所から個人情報が出た、という場合もこの種の「もち去り」が発生した、といえる。

アナタから漏れた場合は深刻な裏切りとなりうるが、第3者のカレが言いふらしたというような場合は、今後カレには近づかない、近づけない、ということにより対応しやすいかもしれない。逆に、アナタなら対面して責めることもできるが、カレはつかまえてくれないので、勝手にしゃべらせておくしかない、という側面もある。

カレが単なるうわさ好きというだけで、悪意もなく相手かまわず知ってる人のことを眷

30) F. カフカの有名な小説「審判」や「城」には、ワタシの鏡像(宣告や罪状)が明かされないまま、他者カレラの間をたらい回しにされる不安と恐怖がえがかれている(Kafka 1925, 1926)。ソシオン風に貧困なコメントを加えるならば、「変身」ではワタシのワタシ(私III)が、「審判」ではアナタのワタシ(私II)が、「城」ではワタシのアナタ(私I)の正体が、主体ワタシの目に捉えられない、その不安な状況が不思議なリアリティをもって描写されている。

ワタシという存在を構成する社会的ループに発生したこれらの混乱が、単なる文学青年の実存的不安などというものとは次元を異にした旧ソビエト共産主義社会における恐怖、見えない秘密警察と隣人の密告の恐怖、そして故なき自己批判の蔓延問題と絡んでいることを、遅ればせながら確認しておく必要がある。

31) 「内申書」がワタシに開示されないままカレからカレに送られるばあい、生徒は「不安」に駆られることになる。反対に、相手のプライバシーにかかわる情報、つまり鏡像を思わせぶりに秘匿することは、他者をコントロールする上で極めて有効だろう。特に、悪事や前科、スキャンダルの種などを知っている「かのように」ほのめかすことは——何かやましいあるいは恥ずかしい「負圧」をかかえている(と思ひこんでる)——人を支配する一般的な手法である。全智全能の「神」の権力もこれによる部分が大い。



めたり貶したりしていることもあるかもしれない。そうしたばあいは、カレは、ワタシの評判を撒き散らす媒体、ワタシの物語の語り部として機能する。カレとワタシは直接会えないので、正の像にせよ負の像にせよ、ワタシの荷重表象は伝説化しやすい。

#### 4-4. ダレカが語る

##### 4-1 ダレカがワタシについてワタシに語る ( $A^d : D \rightarrow A$ )

$A^d : D \rightarrow A$  は、誰かワタシ A の知らない人 D がワタシについてワタシ A に語る、というセルである。突然知らない人から呼びかけられて振り向いたらもう群集のなかに消えていた、などというケースを考えることができる。ダレカが耳もとでささやいたり、罵声が投げかけられたりした場合も、このコミュニケーションである。教室の机に落書きがされていたり、お花が置いてあったりするのも同じで、それが誰なのか特定できないばあい、ネットワーク上に他者が定位できないので、ワタシとしては対応がとりにくい。特に、ダレカわからない人物からの無言電話やブラックメールのようなネクロな嫌がらせは誰しも不快で不安なものだろう。

逆に、ダレカ知らない人の小さな好意は結構大きなよろこびをもたらすことも事実である。知らない人の激励は、フリーなポジオン荷重と化してネットワークを浮遊回流しやすい。また、ダレでもいいダレカとの共歓は、肩を抱き合っただけの熱狂的応援などにみられるように、すべての人がひとつであるようなコミュニタスの経験をもたらす。

##### 4-2 ダレカがワタシについてアナタに語る ( $A^d : D \rightarrow B$ )

$A^d : D \rightarrow B$  は、鏡像もち込み型のコミュニケーションである。(次のセル 4-3 はもち出し型になる)。ダレカ知らないあるいは怪しい人 D がやってきて、声を荒げたり、逆に潜めたりしながら家族 B とワタシについて話し込んでいる、といったばあいを考えることができる。ふつうの人は、かなりこころを乱されるだろう。そのダレカが白衣を着ていて医師のようだったり、役人みたいだったりすれば、すこしは安心するかもしれない。このばあい、ダレカ D はカレ C に変わって、3-2 のモードに近くなる。

ダレカ知らない人がニコニコしながら、アナタの息子さんは秀才で、などと家族と話しているのを横で聞いたりするのは、誇らしかったり恥ずかしかったりするにちがいない。あらぬうわさにせよほんとうの秘密にせよ、ダレカの告げ口によって、ワタシについての情報が、家族や親しい上司のような身近な他者の耳に入る、といったタイプのコミュニケーションがこのセルである。

ご注進に及んだのがダレカを糾明できない以上、ワタシは他者一般に対して警戒的になりやすいし、ならざるを得ないだろう。

#### 4-3 ダレカがワタシについてカレに語る (A<sup>d</sup>: D → C)

A<sup>d</sup>: D → C は、ダレカがワタシについてカレに語っている、というセルである。その内容がマイナスのばあいは「密告」型のコミュニケーションとなる。ダレカ D が職員室の先生 C のところへ行ってどうやらワタシ A のことを話しているようだ、といった状況はけっこうストレスがたまらう。そのダレカ D を廊下でつかまえて、「君、ぼくの何を何か話しただろう!」と問い詰めても、「べつに何も」「ワタシじゃないよ」、と言われればそれまでである。負性の密告や匿名の告発のばあい、ダレカ D をつかまえてみてもアナタ B のモードに引きよせることはできない。

しかし、ワタシのプライベートなことが、カレ C (たとえば先生) に漏れているのは確かだとしたら、ダレカが漏らしたにちがいない、と考えざるをえない。このばあいは、アナタをふくめて身近なところに、誰か密告者、裏切り者がいる、ということになる。アナタへの基本的信頼が足元から崩れたとき、B モードのアナタがダレカわからない D モードへ退いて、ネットワークの位相が溶解しはじめる。流動化した他者性が、ワタシをとりまくように暗闇のなかでうねりはじめるだろう<sup>32)</sup>。

反対に、オールスターや人気投票のランキングのように、仕事や人柄を評価するポジオンのコミュニケーションもないわけではない。ダレカ、つまりワタシの知らない人 D がワタシ A のことを、カレ C の前で誉めていた、ということを知るのは、うれしいことに違いない。誉めるにせよ貶すにせよ、ダレが話したか話しているかワタシにははっきりと見えないその分だけ、不安や期待のゆらぎが生まれやすく、他者性の荷重流動が起こりやすいセルである。

#### 4-4 ダレカがワタシについてダレカに語る (A<sup>d</sup>: D → D)

A<sup>d</sup>: D → D は、ダレカがワタシのことをダレカに語っている、というかたちのコミュニケーションである。このダレカも目に見えにくいので、ダレカがうわさしているという心

32) たったひとつの他者性の穴、ネクロン（負圧）の見えない穴が流動することによって、ネットワーク世界全体がネクロン性のフィールドと化す。主体は否応なく、そのネクロ化した他者性の世界と防衛性のインターフェイスを築かざるをえない。嘘つきや罪人が、ふつうの世間的な生活においてもつねに脅えて、防衛あるいは攻撃性の構えをとるのは、ひとりでもワタシの疾しい部分を知っている人に出会ったとき、自分の生活あるいは物語が終わるからであり、しかもその知っている人がダレカわからないからである。その分からないダレカひとりのために、疾しいワタシは、すべての他者にたいする警戒を解くことができない（「サブマリーン効果」）。

配や期待は一挙にミンナへと拡散しやすい。妄想の生じやすいコミュニケーションのモードである、といえよう。

ダレカ D への荷重備給は、ダレと特定できない他者性 (の予期ポテンシャル) である分だけ、はじめから浮遊しており、となりの 4-3 よりも滑走しやすい。宵闇をよぎる人影や足音、白昼の意味ありげな視線や指差し、思わせぶりな目配せや含み笑い、さらには突然の沈黙など、ダレカ の存在をリアルに現前させるメディアに、ワタシ (たち) は (特にナーヴァスにならなくても) 十分すぎるほど取り囲まれている。

ダレカは一人とは限らない。それは「スパイ」や「陰謀」のような見えない組織の一員であったり、「ミンナ」や「世間」とよばれる捉えどころのない他者たちの「連結体」<sup>33)</sup> であったりする。しかもこの「ダレカ」はたったひとりでも「ミンナ」という複数モードへ拡大しやすい特異な性質をもっている。ワタシの机に書かれた落書きは、たったひとりの仕事でも、ダレカわからなければミンナが疑わしい。闇を走る影はたったひとつでも、暗い森の全域を他者性で充満する。負性のダレカは暗闇のなかで即座にミンナに変身する。ダレカ知らない人からほめられるのと、ダレカわからない人から罵られるのは大違いなのだ。ダレカはじつはもともと原初の他者性<sup>34)</sup>、もっとも直接的なモードで経験される他者性であり、それが一定の像 (顔) をもつものとしてネットワーク上に定位され、必要十分な予期をもって対応できるように構造化されてやっとかレやアナタとして指向されるようになる、と考えるべきだろう。

## 5. マトリックスとコミュニケーション

### 5-1. 領域とコミュニケーション

#### 5-1.1 自己回帰性のループ

ここでマトリックスの領域と大域的なコミュニケーションの流れについて要約しておこう。まず、図 5-1 のマトリックスの楕円で囲んだ対角線上のセルをごらんいただきたい。左上から右下に並ぶこれらのセルは、それぞれいちばん外側のアイコンと外から 2 番目の

33) 筆者のひとり (木村) はかつて、日本神話に登場する「ヤマタノオロチ」は、疑心暗鬼でうねる私たち自身のネットワーク=暗闇の連結体だった、という初夢を見てとび起きたことがある (84 頁の注 54 を参照)。正体をかくした包囲攻撃を得意とするサル的一种であるヒトにとって、他者は本来、「個体化」される以前に (しばしば見えない)「連結体」として現われると見るべきだろう。

34) この見えないダレカの結託や指し合わせに対する疑念は、妄想化しやすくしかも検証しにくい。このレベルの「他者性」をめぐる最重要問題のひとつが密告と秘密警察による「粛清」と「恐怖政治」であり、もうひとつが「妄想的他者」の出現を特徴とする「精神分裂病」問題 (木村敏 1990) である。

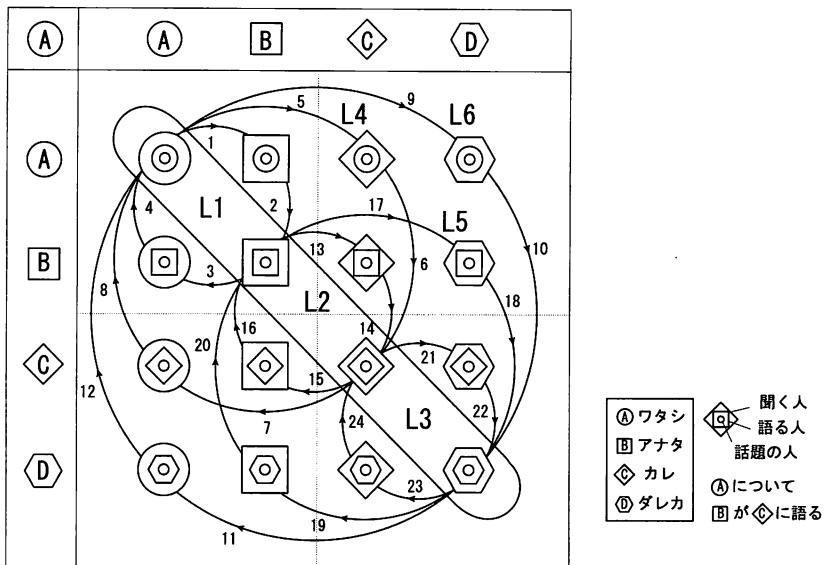


図 5-1 マトリックスとコミュニケーションのループ

L1はワタシとアナタのループ、L2はアナタとカレのループ、L3はカレとダレカのループ、L4はワタシとカレのループ、L5はアナタとダレカのループ、L6はワタシとダレカのループ。楕円で囲んだ対角領域は、自己回帰性のコミュニケーション。

アイコンがおなじ種類のアイコンになっている。これは、「語る人」と「聞く人」が同じ人であること、つまりその人がその人自身に語りあるいは聞かせていることを示している。

左上のセルから順に説明しよう。1行1列目のセルは、マルであるワタシ A が、ワタシ A について、ワタシ自身に語る、というコミュニケーションのループ、つまり A の自己回帰性の意識を表わしている。2行2列目のセルは、四角であるアナタ B が、マルであるワタシ A についてアナタ自身に語っている。つまりワタシ A についてのアナタのひとり言、あるいは思考である。3行3列目のセルでは菱形であるカレ C が、ワタシ A の情報をカレ自身に語る、つまりワタシについて思案している。右下端のセルでは、ワタシ A について六角形であるダレカ D がダレカに対して話している。いずれの「思考」も声に出してもいいし、内語で行われてもいい。これら対角線上のセルは、それぞれの自己回帰性のコミュニケーションを表わしており、全体としてネットワーク内部の「思考」（集団のばあいには内輪の「会議」など）に対応している、と考えることができる（表 2-1）。

表 2-1 自己回帰性のループ

自己回帰	正/P (posion)	負/N (necron)
A <sup>a</sup> : A → A	自信 舞い上がり	自虐 落ちこみ
A <sup>b</sup> : B → B	魅惑 ほれ込み	不信 愛想つかし
A <sup>c</sup> : C → C	審査 批評	たらい回し
A <sup>d</sup> : D → D	もちきり 評判	黒いうわさ スキャンダル

### 5-1.2 可能空間

一般に、自己回帰性のループは時間にたいして情報（メッセージ）を保全する。語る人と聞く人が同じ「話」は、誰か他の人に聞かれたり読まれたりしなければ、外部に漏れない。しかも、自分の少し前の思考や状態は自分自身に透明である。この内密性と保存性を活用することで、意志や思考のような情報を「可能態」のまま保持して選択的に備給する、という内面的な操作が可能になる。ひとり言や、会議、内緒話といった自己回帰性の情報は、誰かに話したり知られたりするまでは取り消し可能であり、この「取り消し可能性」が、自由な選択性の母胎としての「可能空間」（Winnicott 1965）を「内部」に構成することを可能にする。

思考や感情を他者に知られたとき、この内面の自由は失われる。不意の目撃や盗聴は、この内面の防御壁を破って、本来自由であるはずの内面の想念や思考を「現実」と化する。見られたり聞かれたとわかったとき、知られてしまった思考とその主体であるワタシは、取り消し不能なまま他者のまえでいわば「磔」にされるしかない<sup>35)</sup>。

内面の壁を透過する視線、持続的な監視や盗聴は、可能空間自体を崩壊させる<sup>36)</sup>。さまざまな迷いや欲望のなかから、自分にふさわしくないものを取り消し、しかるべきものを選ぶ、その選択の自由度が消失する。ちなみに、「誰でも情欲をいだいて女をみたものはすでに姦淫をしたのである」（『マタイによる福音書』）と語るキリスト教の神が、人間の内面に

35) J.P. サトルは、ワタシに向けられた他者の視線/目撃によって自己の自由が流出する羞恥体験について興味深い分析をくわえている(Sartre 1943)。全知の神のもとでは、思っただけでも罪になる、とすれば、私たちの内面の自由度は大幅に減少するだろう。

36) これが、夕鶴がなぜ飛びたたねばならなかったかその理由であり、その他多くの「見るなノ禁」が誕生した理由である(河合 1982)。反対に、M. フーコーは近代監獄の「一望監視システム」において、眼指しつづけることで内面まで支配するにいたった「権力」の誕生について語った(Foucault 1975)。

浸透して強力な支配権を確立したのは、すべてを「お見通し」の目によってであった。いつも天上からワタシを見ているその神の目は、世間の目を霞ませて超越を可能にすると同時に、ひとりひとりの内面にただよう思念をただの「空想」ではなく「リアル」な現実として備給することで、厳しい「審判」の対象とした、と考えられる。

### 5-1.3 変換の流れ

ふたたび図5-1をごらんいただきたい。対角領域をはさんで、時計回りにまわるコミュニケーション／情報の流れが存在する。それぞれのループは、ワタシAとアナタBとカレC、それにダレカDの4人が、ワタシAをどう見ているか、について、荷重を変換しながら情報を交換するコミュニケーションのプロセスを表わしている。

まずL1、L4、L6の3本のループをごらんいただきたい。左上のワタシAの自己回帰のセルで紡がれた情報(ワタシAの荷重像=鏡像)が右方向へ流れだして他者B、C、Dのほうへ遠ざかり(1、5、9)、さらにその線が下方向に送られて、対角線上に位置する他者の自己回帰ループに取り込まれる(2、6、10)。その他者の回帰ループからさらにその左方向へコミュニケーションの変換線がのびる(3、7、11)。遠い他者のほうから流れ込むかたちで、ワタシの鏡像がワタシAに近づいてくる。左端の列に達した線は、左上端の出発点であるワタシの自己回帰ループにふたたび帰還することになる(4、8、12)。

### 5-1.4 「もち出し」と「もち込み」

L1、L4、L6ではワタシAがループを構成しており、鏡像(私II)は本人であるワタシに開かれている。これに対しL2、L3、L5はワタシに対して閉じたループをつくっている。いずれのループでも、対角線をはさんで右上半分の領域では、Aの鏡像がネットワークの(ワタシAから見て)先の方へ送り込まれ、あるいはもち出される。この右上の領域を、鏡像の「もち出し領域」とよぼう。A→B、A→C、A→Dと、右にいくほど、ネットワークの位相上、Aの鏡像がA自身から遠ざかる、つまり自己像とその評価荷重が、他者側に「疎外」され、より遠方に譲り渡されることになる。

対角線の反対側、左下の領域は、他者の場所にあったワタシの「鏡像」、ワタシAの情報が、逆にネットワークのより遠いところからワタシに近いところへ向かって送り返されてくるフェイズに対応している。セルを右から左へと移動するにつれて他者のもとにあった

ワタシ A の鏡像がワタシ自身に近づいてくる<sup>37)</sup>。鏡像が回帰してくるこの左下半分のセル集合を「もち込み領域」とよぼう。

全体として、鏡像の回流は、他者の媒介による自己疎外と自己獲得<sup>38)</sup> という人間の社会的な運動のプロセスを表わしている、といえよう。他者の場所、鏡像の回廊を通過して自己へと回帰することは、良きにつけ悪きにつけ、人間が人間であるための必然である。

### 5-1.5 ループの位相

L1、L2、L3の3本のループは、いずれも、ネットワークの上で位相的に隣接したソシオンどうしを連結したループで、それぞれ当事者どうしは顔を合わせて「会話」を交わすことができる。ワタシ A からアナタ B へ、アナタ B からワタシ A へと周回するループが L1、さらに、アナタ B からカレ C へ、そしてカレ C からアナタ B へと運ばれるループが L2、カレ C からダレカ D を経てそのダレカ D からふたたびカレ C へもどる3つ目のループが L3 である。

これに対し、ネットワーク上で位相的に離れたソシオンを結ぶ L4、L5、L6 の3本のループは、先に検討した (59 頁表 1) それぞれのモードに特有のメディアによって連結される。たとえばワタシ A とカレ C を直接にむすぶループ L4 では、手紙など書かれたコトバが重要なメディアとなる。アナタ B とダレカ D を結ぶループ L5 では、チラシや密告といったいくつかのメディアを考えることができる。最後にもっとも外側をまわるループ L6 は、ワタシ A とダレカ D を結ぶもので、宛名のない手紙や、送り主のわからない花束などがメディアとなりうる。

これらのループのうち、アナタ B とカレ C をむすぶ L2、カレ C とダレカ D をむすぶ L3、アナタ B とダレカ D をむすぶ L5 の3種類のループでは、ワタシ A は排除されていることに注目してほしい。つまり、ワタシ A についてのコミュニケーションであるにもか

37) 「もち出し/出力」と「もち込み/入力」は、能動か受動かで現実的な意味づけがおおき異なる。能動的なもち出し/出力としては、自己紹介、自慢話、ホラをふく、宣伝するといった動作が考えられ、N 型、ネクロン性の出力としては、憐れな自己暴露や露出などを考えることができる。

「もち出し」の受動型つまりもち出されるタイプとしては、日記などを読まれる、知られる、盗まれる、送られる、回覧されるといったものから、秘密を嗅ぎつけられたり (正村 1995) 探られたり、それをダレカに告げ口あるいは密告されるといったものが考えられる。「もち込み」の能動型は、アナタ B やカレ C がワタシ A のことをどう思っているかを自分から聞き出す、探る、といった動作が考えられる。盗聴などもこれに含まれるだろう。受動型は、誉められたり、貶されたり、囁かれたりという鏡像の誘導呈示がこれに相当する。

38) 親しい回帰軌道から自己を切り離して、よそよそしい他者のもとに自己を送り出す次元、つまり望ましいか望ましくないかは別にして、自己をいったん疎遠なものとして他者の場所に外化する「自己疎外」(疎外=譲り渡し alienation) 次元が、「もち出し」領域の特性である。「もち込み」は逆に、自己回復であるといえるが、同時に鏡像の誘導や押し付けが可能になる次元でもある。ちなみに、「疎外」は、「弁証法」(Marx&Engels 1845-46、平田 1971) の名とともに、かつて一世を風靡した「社会科学」のキーワード、というよりマジックタームのひとつであった (Gabel 1962)。

表 2-2 鏡像のポリティックス

	出力/入力	正/P (posion)	負/N (necron)
L 1	A <sup>a</sup> : A → B A <sup>b</sup> : B → A	自慢 ほら吹き 称賛 お世辞	謝罪 告白 非難 脅し
L 2	A <sup>a</sup> : B → C A <sup>c</sup> : C → B	紹介 ふれ込み 宣伝 通報 評判 弔電	告げ口 告発 たれ込み 忠告 苦言
L 3	A <sup>c</sup> : C → D A <sup>d</sup> : D → C	報道 ビラまき 人気投票 ランキング	ふれまわり 引きまわし 非難 デモ行進
L 4	A <sup>a</sup> : A → C A <sup>c</sup> : C → A	自己推薦 自己紹介 表彰 承認 通知	懺悔 自己申告 判決 裁定 批判
L 5	A <sup>a</sup> : B → D A <sup>d</sup> : D → B	広報 売り込み 選挙応援 投書 献花 募金	リーク 言いふらし ねじ込み 抗議
L 6	A <sup>a</sup> : A → D A <sup>d</sup> : D → A	演説 自己宣伝 祝賀 歓呼 拍手喝采	露悪 自己批判 糾弾 ブーイング

かわらず、話題となっているワタシはその環のなかに入っていないのである。当人からすると、ワタシ A が直接関知しないネットワークのループのなかに、ワタシ A の鏡像が閉じ込められたまま「たらい回し」にされていることになる。

## 5-2. 鏡像のポリティックス

ワタシの知らないワタシの鏡像が、閉ざされたこの回廊、ネットワークの暗闇からワタシ自身に帰還するときが、ネットワークにおけるワタシの命運が決まる時である。手をこまねいてその帰還の時を待つのでなければ、ワタシ A はワタシ A のシンボル-分身が虜になっているこの閉じた回廊を能動的にこじあけて、自分から鏡像-分身を救い出さなければならぬ<sup>39)</sup>。ワタシ A は、薄暗い回廊から傷ついた鏡像を救出し、あるいはお化粧をほどこして送り込むために、ここを砕き、手をつくすことになろう。

とりわけ情報活動の対象となるのは、ワタシ A とアナタ B のループをはじめとして、ア

39) 現実のネットワークでは、正直であればすべての情報が得られる、というわけではない。他者がワタシをどう思っているかは、聞けば教えてもらえるとと思っている人は能天気な人だし、教える人はバカ正直な人といわれるだろう。なぜなら、相手が騙そうとおもっていたら本当のことはいわないだろうし、つよい信頼に結ばれていたとしても、相手が傷つくようなことは口にしないのがまともな人間のたしなみだからである。いうまでもないが、以上の議論は、個人だけでなく、組織やセクト、部族や国家間のネットワークにおいてもそのまま適用可能である。鏡像をゆだねあうソシオンのネットワークは4個のユニットだけで十分に複雑な外交/インテリジェンス問題を抱え込みうるのだ。



ナタ B とカレ C、カレ C とダレカ D、アナタ B とダレカ D のあいだの回廊 L 1、L 2、L 3、L 5 である<sup>40)</sup>。アナタ B は本当のところワタシ A をどう思っているのか (L 1)、アナタ B とカレ C のあいだでどんな会話や合意がなされているか (L 2)、カレ C はダレカ D と何か企んでいないか (L 3)、アナタ B とダレカ D と結んでいる関係はどういうものか (L 6)、といった問題についてそれなりに情報を獲得し、ありうるシナリオを構成することが、コミュニケーションをめぐる重要な戦略課題となる (表 2-2)。以下それぞれのループについて、若干の重複をお許しいただいて、含みを検討してみたい。

### 5-2.1 鏡像の帰還

まず、L 1 と名づけた左上部のループ、ワタシ A とアナタ B のあいだの回廊から説明しよう。1 行 1 列目のセルでは、ワタシ A が自分に語ることで A の像と荷重 ( $A^a$ ) つまり A の自己像が自己回帰的に形成される ( $A^a : A \rightarrow A$ )。右の 1 行目 2 列目のセルでは、A は自分をどう見ているかを B に伝える ( $A^a : A \rightarrow B$ )。A が A 自身をどう考えているかを A から聞いた B は、そこからタテに下がった 2 行 2 列目のセルで、A への信頼荷重を梃子にしてカッコをはずし、B 自身が A をどう見るか、A についての像と荷重 ( $A^b$ ) を形成する。この  $A^b$  は、B が B に語る回帰ループつまりワタシ A から見たアナタ B の内面にとりこまれる ( $A^b : B \rightarrow B$ )。B が見たこの A の姿と評価 (つまり A からみたワタシの鏡像) は、B の話や態度を通して A に伝わる<sup>41)</sup> ( $A^b : B \rightarrow A$ )。アナタ B から情報を得たワタシ A は、B にたいする信不信の荷重にしたがって、その鏡像をワタシの内部の自己像に帰還させる ( $A^a : A \rightarrow A$ )。

### 5-2.2 基底信頼

対面的な会話においては、ワタシとアナタは表象の指示と措定をめぐって可逆的で対称

40) 信頼できる他者へのチャンネルが必要十分でなければ、閉じたループ、つまり他者の内面や内輪の会話から情報を取得する道はひとつしかない。つまり、盗み見るか盗聴するか、さもなければつかまえて問い詰めるかである。それは他者をいとおしく思っているか (ポジオン)、おぞましく思っているか (ネクロン) を問わない。親が勝手に子どもの引出しを開けたり、日記を開いたりするのは、まさに子どもへの愛情 (というより同一化というべきだろう) が強いためである。

問題はまさに、信頼が欠如しているその程度に逆比例して、のぞきたくなる、という一点にある。この親の子にたいする「のぞき見」問題は、信頼の欠如において愛情は猜疑心に変換される、という普遍的真理を物語っている。つまりワタシの渴望してやまない他者の自由な内面が、まさにその自由そのものによって、ワタシに対する裏切りの不安を生み出しつづけるのだ。愛と不信にゆらぎながら他者の内面を目指す者にとって、まさに「他者、それは地獄」である (Rimbaud 1873)。

ちなみに、 Kommunismus における盗聴、密告、拷問の蔓延も、おそらく同一のメカニズムによるものであろう。偉大なる革命の「父」であったスターリンやボル・ポトは、「わが子」(である民衆) に過酷な献身を要求した。そしてその民衆はもとより共産黨員 (つまり人間) を信頼できなかったがゆえに、盗聴と密告に頼らざるをえず、その信頼できない「わが子=他者」を愛そうとしたがゆえに、虐待・拷問を繰り返して肅清した、と考えられる。

41) この場合、伝えようとしても伝わらないものもあれば、伝えなくても伝わってしまうものもある。中井久夫の「伝えることと伝わること」(中井 1991) という小論が参考になる。

的な関係にある。ワタシはアナタに対象となる話題を指示して荷重を送る（あのリング、おいしそうですね!）。それと同時に、アナタの荷重備給の様子（あら、そうかしら?）は、相づちのニュアンスや、目の表情、うなずき具合などによって、ワタシにフィードバックされてワタシの荷重備給に影響をおよぼす。合致すれば、指示された表象のリアリティは相互主観的に裏打ち（あるいは破壊）され、合致しなければ、さらに会話が弾むか、もしくは気まずい沈黙が訪れたりするかもしれない。アナタがワタシに話す場合もおなじで、ワタシはアナタに「うそ!」と疑問をなげたり、「ホント!?!」と感応したりすることで、自己の備給状況をリアルタイムでアナタに表出する。

とくに、話題を共有しながら、いっしょに笑うことは重要である。笑いは、表象にたいして、同時に同じように荷重の撤収（脱備給）がおこなわれたことを端的に示す普遍的なシグナルだからだ<sup>42)</sup>。いっしょに笑うにせよ、うなずくにせよ、直接に会って顔を合わせ、声を聞き、目を見て話しあえるアナタがひとりもいなければ、ヒトが表象をつむいでこれに備給し、これをそれなりにリアルな「世界」として生きることはむずかしい<sup>43)</sup>。とくに思春期から青年期にかけて、ワタシの問いかけに誠実に答えてくれるアナタ、信頼できる他者（サリヴァンの significant other）を少なくともひとりもつことは、決定的に重要である<sup>44)</sup>。

### 5-2.3 他者性の回廊

アナタ B がワタシ A についてカレ C に話す、というコミュニケーションのモードでは、ワタシはそれを側聞することはできても、何が話されているかを直接知ることができない。

42) あまり笑うことは期待できないが、木村の「笑いのメカニズム——笑いの統一理論」を参照（木村 1983）。

43) ワタシとアナタは、ソチラとコチラという双称的な場所の対称変換によって、互いの備給を裏打ちし、表象とそのリアリティを共同主観的に確認する。とくに対面状況では、呼びかけや視線の誘導、うなずきや笑いなどをとうじて、おたがいに表象が共有され、備給が共役的であることをリアルタイムで確認することができる。

44) もちろん、ワタシとアナタで、正反対の備給がおこなわれ、意見が分かれることもありうる。そんな場合には、アナタの顔きや微笑は、かえって疑問と不信を増幅することになるかもしれない。ちなみに、信頼とは、意見がちがっても、他者を不誠実だとは決めつけないことである（ソシオンの第3階層＝メタ空間への「くり込み」が、いずれ、この「おかしい」考えや「変な」人を理解する「解」を生み出す）。

とくに悪意をもっていないくても、信頼するアナタがワタシにウソを言う（あるいは本当に思っていることと別のことを言う）ことは、ふつうのまともなネットワークでもよくあることである。本稿の提示するソシオマトリックスは、「話題」がルーブを巡るうちに、その真値が、ウソ N とホント P のあいだで変化する事、つまり、あるメッセージの真偽は、それを伝える人や聞く人のあいだの信頼と不信の布置に依存して社会的に（ネットワーク拘束的に!）決定される、という仮定を背後にいだいている。

これによって、ヒトの邪悪さの一部は、特定の人格的欠陥によるのではなく、むしろ信/不信の荷重関係で編まれたソシオネットのルーブの特性としてとらえることが可能になる。非のうちどころのない人が、ときにとんでもないウソをつくのは、その置かれたネットワークの信不信の連結構造による可能性が高い。人に嘘をつかせたり裏切ったりさせる力は、そのヒト個人の邪悪さであるよりは、個体に畳み込まれたネットワークの荷重パターン、トリオンと名づけた3項演算子の P/N 布置パターンなのだ。その布置構造の全類型と演算については、ソシオンの一般理論III（木村 2001）ですでに大枠を論じた。われわれは、図6-1に示した多重マトリックスにおいても、ウソとホントの荷重変換がトリオンによって制御されるだろう、と予想している。

つぎの課題は、ソシオンのネットワークにおいて、この信/不信をめぐるトリオン演算が効くかどうか、シミュレーションをこころみることである。アナタがウソつきか正直かは、アナタの「人格の属性」ではなく、ワタシとアナタ、カレ、ダレカのあいだの信/不信をめぐる「関係の属性」として再考する道が開かれるだろう。

ワタシの見ているところで、聞こえないように（目配せや薄笑いなどをとまなつて）コミュニケーションが行われることもあるし、時には、聞こえよがしにアナタがワタシのことをカレに話す、ということもあるだろう<sup>45)</sup>。ワタシのまったく知らないところで、ワタシの悪口を肴に、アナタ B とカレ C がおおいに盛り上がる、などといったこともよくありそうである。とくに、ワタシが現れたとたんに会話が止んでミンナ顔を見合わせた、などという場合は、そうした公算が高い。

そこで、「何を話していたの？」とアナタに聞いても、アナタ（たち）は「べつに、なんにも」などとほぐらかしてまた会話をつづけるかもしれないし、気まずい沈黙が支配するかもしれない。そんなとき、たいていのワタシは、自分の大切な鏡像-分身がいわば「カクシンボ」されたような不快な不安感を覚えるにちがいない。

まさにこのときが、ワタシの鏡像が他者の場所へ「疎外」された決定的な瞬間である。いわば、ワタシの大切な「鏡像」が誘拐されて<sup>46)</sup>、アナタとカレの間の回廊に幽閉されたのだ。その暗い回廊をアナタの手からカレの手へとたらい回しされるあいだに、ワタシの鏡像は、ときに美しく肥大することもあるが、おおくの場合、くさされたり貶されたりして醜く変身する。

しかも、その変身をもたらすものは、基本的にワタシとは無関係なカレとアナタの関係、つまりカレとアナタ（さらにはダレカ）の間の信頼や不信の関係がもつ荷重変換機能である。アナタとカレのループに拉致されたワタシの鏡像は、ワタシを超えたネットワークの事情によって不本意な変身を余儀なくされるのだ。

---

45) アナタ B が、となりの人 C に「この A さんはネェ、……」などと声をひそめて話しかけたりすると、A であるワタシはそれなりに気になるだろう。ワタシが「ネェ、アナタ……」と呼びかけているのに、わざと無視したようにとなりの C さんの方に話しかけたりするのも、気分がわるいものである。アナタとカレの会話が気になって「何の話？」と口をはさむと、「アナタには関係のないこと！」と遮断されたりした子供時代の経験をだれしももっているだろう。

とぼけて話題をそらしたり、真摯な問いを鼻で笑ったり、冷水を浴びせて雲隠れしたりといった不誠実なコミュニケーションのタイプは、アナタがカレのモードに隠れたり、逃げ込んだり、ズレおちたりするパラコミュニケーションとともに、今後の探究課題である。

家族や職場などすぐ身近にひそむこの魔のコミュニケーション領域は、分裂病や妄想性のパーソナリティを生み出すコミュニケーションの病理として、フロイト (1921)、サリヴァン (1954)、とくにレイン (1961) 以降、リッツ (1985) やウィンその他社会学派の精神医学者によって注目されてきたところである。

46) 一般に、「告げ口」では、(ワタシ A のことをこっそり「誉める」という戦略もありうるが、)ワタシがアナタに打ち明けた秘密やマイナスの事項が、ワタシの了解なくアナタによってカレにもち出される。「ここだけの話」という約束で保留状態においたはずのワタシの失態や恥ずかしい過ちが、カレに知られることで、取り消しになる可能性を失い、そのままリアルな、そして不本意な「現実」になる (木村 2000)。

これによって、ワタシとアナタの信頼関係が損なわれると同時に、アナタと相互選択的に実現されるはずの自己の自由度もおおきな制約をうける。アナタは、ワタシのバカな想念や愚かなふるまいを「だれにも言わない」ことで「無かった」ことにしてくれるという意味でも、ワタシの選択的な主体性を支持・保全してくれる大切な他者である。「告げ口」は、そのアナタへの信頼を裏切り、今後アナタとの会話には気をつける、というかたちでワタシの世界構成の自由度を殺ぎ、思考の内面性を剝奪する。

#### 5-2.4 鏡像ゲーム

アナタでありカレである仲間たちによって自分の鏡像がたらい回しにされるその不安は、学校の休み時間に教室の後ろで、あるいは会社のロッカールームで、ほとんどすべてのヒトが経験してきた「他者性」の不安であり、その他者に鏡像を人質にとられたワタシの不安である。そのとき、暗い回廊でアナタとカレは何を話したのだろうか？そのワタシ（について）の会話は、ワタシをいじめる相談だったかもしれないし、役付きにする相談だったかもしれない。利害を超えても、他者の愛情と承認を必要とするワタシにとって、その回廊で何が話されたかは大変気になるところである。

信頼するアナタがいれば、その人に本当のところをたずねることができる。しかし、ワタシに本当のことを言ってくれるアナタがひとりもないならば、ワタシは見えない他者性のうねりによって包囲されている、と感じてもそう不思議ではない<sup>47)</sup>。このとき、もち出された「鏡像」をとりかえそうとするワタシと、それをもって逃げるアナタ（たち）とのオニゴッコがはじまる。アナタ（たち）は「オニさん、こちら」とワタシの鏡像をもって逃げまわり、ワタシはそれを追いかける。アナタをつかまえて本当のことを問いただす、つまり鏡像を奪いかえすまでは、ワタシはオニをやめることができない。いつの間にかワタシはオニゴッコのオニになっているのである。

#### 5-2.5 うわさの私

アナタが話す相手がワタシには見えない匿名のダレカになったらあいつも基本的に同じで

47) たとえアナタが本当のことを言ってくれたとしても、もしワタシがそのアナタ B を信頼していなければ、せっかくの情報も疑念を増すだけかもしれない。アナタも当てにはならなかった、から始まった「信頼喪失」は、みんな陰で何を言っているか、たくらんでいるかわからない、といった「人間不信」を経て、最終的に、ワタシは見えない他者性の意図によって取り囲まれ、なぶりものにされている、というリアルな「被害妄想」にまで追い込まれざるをえないだろう、と合理的に推測できる。

そこまでストレートにいかになくとも、アナタを信頼できずに不信にとらわれたワタシは、せっかくのアナタの誘いを断るようになるだろうし、そうでなくても僻んだりいじけたりしやすいだろう。声をかけにくい、と感じたアナタたちはワタシから遠ざかり、じっさいに陰口をたたきはじめるかもしれない。こうして、「ミンナほんとうは、ボクのことをイヤなやつだとおもっているんだ！」というたぐいの「予言」が「自己実現」(Merton 1949、徳岡 1987、大村・宝月 1979) する。被害妄想は、ただの妄想ではない。背後の結託や見えない陰謀の不安は、アナタへの「基本的信頼」を欠いていることからくる論理的必然なのだ。

このネクロンの予言の環を回すおおもとの力は、ワタシ A のアナタ B への「基本的信頼」(B<sup>a</sup>) の欠如である、という点はいくら強調してもしすぎることはない。たったひとりの信頼できるアナタがいれば、私たちヒトは、暗い「鏡像の回廊」への幽閉を解かれて、見えない他者性の包囲を突破できるのだ。

アナタへの基本的信頼は、ワタシの視界を保証し、安全を担保するだけでない。それは、パンのタネのように、あたらしい他者へ転移して、出会いをふくらませ、関係を成長させる。信頼はもっとも基本的な社会的資源であり、ネットワークの共有財産である(Luhmann 1973、Fukuyama 1995)。これを失うとき、私たちは自分の安全保障感だけでなく、社会の存立基盤を失うのだ。

ちなみに、この貴重な資源を足元から衝き崩す社会的悪行が、「密告」の横行もしくは勧奨である。ダレカの密告は、「ひとりのアナタを信頼できない」から、「ミンナ疑わしい」という全面不信/信頼恐慌へと容易に発展する。それは友情と自由への信頼にもとづく社会ネットワーク総体の存立を危殆に陥れざるをえない。ネクロ流動による信頼崩落は、マッカーシズムの旋風がふきあれた遠い昔のハリウッドの話だけでない。すぐとなりの学校のクラスなかで、子どもたちに今日も日常的に起こっている事態でないだろうか。

ある。信頼するアナタしか知らないはずのワタシの秘密を、どうやらダレカが知っているらしい、などといった場合が相当する。すぐ後でふれるように、このダレカは、あっという間にミンナに変身する。それがダレカわからない分ミンナが疑わしくなるからだ。もっとも悪いウサバカリとは限らない。アナタがワタシの選挙運動の支援者ならば、誰かれかまわずワタシのよい評判をひろめて歩くといたばあいも十分ありうる。

どちらにせよ、ワタシのもとからもち出されたワタシの鏡像は、基本的に、ワタシの目も手も届かないところでネットワークを転がっていくことになる。ワタシの知らない「うわさのワタシ」は、アナタ B、カレ C、ダレカ D と他者の手（口と耳）を経ることで変身を重ね、あるとき意外な姿となって帰還するかもしれない。このとき、変身を余儀なくさせる力は、くり返すが、ワタシ本人とは関係のない事情、つまりアナタとカレ、カレとダレカのあいだの信頼あるいは不信の程度である、ということが理論的に肝要である。ワタシ A の鏡像をたらい回しにする他者たちの（しばしば「汚い」とののしられる）その「手」は、ワタシ当人に向けられたものというよりも、それぞれがそれぞれに対して結合した信頼あるいは不信の触手であり、ワタシのいないネットワークの編み目編み目の P/N 結合強度である。

## 5-2.6 分裂結合

アナタ B への信頼が十分確かでなければ、カレ C と特定できなくても、ダレカ D に語る（語った）のではないか、という疑念を拭い去ること、逆に語らない、語ってないということを確認することは原理的にむずかしい<sup>48)</sup>。アナタへの信頼が一度ゆるぎだすと、ますます不安になって、人柄まで疑いぶかくなるのはこのためである。

ネットワークでは、ワタシとアナタの関係が重要であるのと同じぐらい、アナタとカレの関係が重要である。アナタがカレを信頼せずにカレの話に耳をかさなければ、あるいはカレがアナタを信頼せずに本当のことを言ってくれなければ、ワタシはアナタとの関係は保てても、カレとダレカつまりアナタ以外の人びとにたいするコミュニケーションのチャ

48) これを逆にとると、カレへの告げ口やダレカへの暴露を脅迫の手段にすることは、他者の自己システムを操縦するのに極めて有効となりうる。「いうたろ、いうたろ、ダレカに/ミンナにいうたろ」という「嘘したて」は、そだち盛りにある子どもワタシの自由な内面を、アナタ（とミンナ）の視線の前ですくませて成長を曲げることにつながる最重要な出来事なのだ。告げ口の相手が先生や警察であっても事情は同じである。

旧ソ連、東欧の共産主義体制における密告の恐怖政治は、われわれがイメージするような権力による弾圧の恐怖ではない。いつダレかここだけの話を当局に持ち出すか、密告したのではないかという不断の恐怖のもとで、誰にもこころを開いて本当の気持ちを言えなくなった内面の苦しみであり、その猜疑のもとで進行する「自己」（つまりワタシ）の「非現実化」と、自律的な個人をささえる内面的主体性の崩壊である（竹山 1983、Solschenizyn 1973-75）。権力への内部告発や密告は、権力による盗聴と同じかそれ以上に、アナタとのループによってのみ紡がれる内面の自由を崩壊させ、信頼のネットワークを内部から腐食させて社会システムの土台を揺るがす深刻な問題を生み出すことに留意すべきである。

ンネルをひらくことができないからだ。

ワタシが無条件に信頼するアナタが、カレに根強い不信を抱いているばあい、事態はやっかいな方向へ進展する。「Cは嘘つきだ」「あいつには気を許すな」<sup>49)</sup>といったアナタBのご親切な「助言」は、Cがワタシに何もしていないのに、Cとの接触を回避させる。Bから話を聞いただけで、ワタシにCにたいする不信の念が芽生えはじめるだろう。そして、ここがソシオン理論のポイントなのだが、ワタシがCに不信を抱くほどに、Bをいっそう信頼するようになる、つまりトリオンのNNP荷重演算<sup>50)</sup>が成立する、と予測できる。

不信と信頼が、憎しみと愛情が、相互に反転しながらエネルギーを増幅して、ネットワークを分断しはじめる。ワタシAとアナタBの信頼が強まるほど、ワタシAとカレCのあいだの不信は決定的となるだろう<sup>51)</sup>。私たちの仮説によれば、人間社会に不和と嫌悪と不信をもたらすものは、力による抑圧や収奪であるより以前に、ネットワークに内生するこのトリオン型のコミュニケーション構造であり、その無自覚な動作である。

## 5-2.7 媒介と権力

権力者である主君には、対等なアナタとちがってこちらから話しかけたり、許しがなければ、目をみることはもちろん、頭をあげることも許されないことが多い。この場合、眼前の誰かが媒介者として、「主<君>」(大いなるアナタ=大君!)とのあいだを取り次ぐことになる。というよりむしろ、この媒介者は、当人のその方、あの方=カレと対話ができないようにする積極的な役割をになう。つまり、むこうから一方的に「呼び出し」たり、こちらからの懇願にやっと「取次ぎ」をする、というかたちで、大いなる(ありがたい、またおそろしい予期を秘めた)「あの方=お上」とのコミュニケーションを「媒介する者」

49) 「ネエネエ、あの人、ワタシのことどう言っていた？」とワタシAがアナタBに問うばあいもあれば、聞きもしないのに、「あの人たち、アタのことなんか言ううったよ」「お耳に入れておいた方がよいかと…」といった忠告、注進がなされる場合がある。ともあれ、アナタであるBは、ワタシAとの友誼を深めるために、あるいはワタシAを仲間に取り込むために、カレCの悪口を吹き込む、というコミュニケーション戦略を意識的・無意識的に採用しうる。そんなわけで、「あいつには気をつけろ」という人には気をつけなければならないが、しかし、その情報が貴重な忠告である場合もあるので厄介である。

50) トリオンは、脳内で信頼と不信、愛と憎悪を変換すると想定される3項回路で、荷重の演算子である。安定トリオンにはPPP、PNN、NNP、NPNの4つの種類があり、それぞれ「友の友は友」「友の敵は敵」「敵の敵は友」「敵の友は敵」という感情の変換論理に対応する。トリオンの詳細な概念については木村(2001)を参照。

51) 「分裂結合」とよんだこの事態を避けるためには、誰とでも腹を割って話せるアナタあるいはカレがネットワークの結び目にいるかどうか重要である。他者を信頼し、他者からも信頼を勝ちうるひとりのカレ、竜馬的なキーパーソンが存在が、しばしば組織や会社や近隣家族の運命を決めるのはこのためである。カルトへの入信と脱会をめぐる家族の力学を検討した渡邊は、このキーパーソンをフォースソシオンと呼んだ(木村・渡邊2001)。

媒介者アナタがカレへの敵意と不信をあらわにしてワタシをとりこむ時、ネットワークに不幸な運命を司る力学のタネが撒かれる。カレ、権力、父なるもの、富めるもの、もてるものへの不信と対決を煽るだけの野党精神の自己誠実、メディアの独善は、不幸と思いついた人々の連帯のために社会の全域に分裂結合をもたらし、子どもたちがあとを継ぐべき未来の社会に不信と猜疑にみちた「アロパラ」(protesting parasite 木村2002)の種子を撒き、ネクロンの遺産を送ることになる、という普遍的な真実を見つめる時が来ているようにおもわれる。

としての位置を占めるわけである<sup>52)</sup>。

このばあい、眼前の媒介者 B はカレ C の代理人としてワタシ A のまゝに現前しており、対話する 2 者のあいだの対称性ははじめから破られている。媒介する者（君側の奸）の介在によって、親しかるべきアナタ、大君、あの方が、カレのモードでワタシのまゝに現前している。権力の本質は、物理力でも強制力でもなく、コミュニケーションのモード偽装にある、というべきである。呪文や儀式によって媒介者が大いなるカレを呼び寄せてワタシのまゝにアナタのように現前させるとき、ワタシ（たち）はこの怪しい他者性、こちらからは見ることも問うこともできない奇妙なアナタ-カレと、非対称的なかたちでインターフェイスされる<sup>53)</sup>。媒介によって増幅された非対称性の「荷重」（デキゴトの予期ポテンシャル）を、大いなるアナタ（大君）のモードで幻覚させること、これが敬虔なワタシたちを恐れさせ誑かしてきた権力のコミュニケーション技法の核心である。

## 5-2.8 暗闇の結託

カレ、あの方がワタシのことをダレカと話している、という状態は、放っておけばいいようなものだが、うっかりするとやっかいなことにもなりうる。ワタシ A は、カレ C がダレカ D となにか示し合せているのではないかと不安になり、目に見えない陰謀のうねりにとりかこまれるように感じるかもしれない。カレラがなにか重大な企みをもっているのではないかと疑えば、ささいな素振りもますますその証拠のように思えてくるだろう。

52) 法廷での陳述に見られるように、カレ C による一方的な「聞き取り」やワタシの側からの「申し開き」では、両者は「対面」はしているが「対話」はしていない。むしろ「対話」は禁じられることがほとんどである。「尋問」や「面接試験」などの息苦しさはまさにこの非対称性にある。一見アナタのモードで現れながら、実は「カレ」のモード（お上、あの方、Her Majesty など）でしかコミュニケートできないこの非対称性こそ、「権力」とよばれる他者性の本質である、と考えられる。

ちなみに、壇上から学生に講義している教師・ワタシは、「ダレ」に向かって話しているのだろうか。居眠りをしたり横を向いて「私語」をしている学生・カレ（ら）に向かいながら、ひとりワタシの考えをワタシに向かって話しているようでもあるし、ダレにむかって話しているのかわからないまま話している場合もありそうである。ともかく、「黙って聞きなさい！」と叫ぶとき、権力のモードが作動することは疑いない。

53) 「お父さん、おまわりさんだぞ」とか、「怨霊が崇っている！」とかいった類の脅しは、「ミンナ、アナタとこのことを……と言っていたよ」といった脅しと同じように、この媒介によってワタシに現前したカレの力（カレへの恐れや期待）によって、アナタの自由を内側から支配しようとする権力（ワタシ）のコミュニケーション手法である。「上の意向を聞いてみないと……」といった類の媒介も同様で、官僚制に内在する権力のコミュニケーションはまさにこのモードで偽装することはよく知られている。権力は日常のいたるところに存在する。それは媒介性の非対称コミュニケーションによって出現する他者性のモードの倒錯なのだ。その姿の見えない他者性の予期におびえ慄くことで、ワタシたちは自身の自由度を失い、みずから媒介者の術中にはまるのである。

媒介の権力は取り次ぐ他者 C の姿をあいまいにするが、取り次がる自己 A の鏡像をあいまいにする申告の脅迫もある。開示されない「内申書」を振りかざして生徒を指導いや支配しようとする教師はその典型的権力である。自分の鏡像を明かされないまま他者の手に牛耳られることは、自分の知らない自分の咎によって未来を左右される不安であり、その不安によって教師の「指導」に従うことは、まさに他者のもとに持ち去られた自己の鏡像のためにみずから身を屈して他者にへつらうことを意味する。この卑屈な服従は、暴力や体罰よりもふかい傷を子どものこころに与える。つまり、対称性を欠く他者の思わせぶりな脅迫に、不安に駆られてみずから迎合するという性の悪い隷属精神を植え込むことになるだろう。

ちなみに、カルヴァンの予定説は、神によって「内申書」（それは明かされないがすでに書かれている！）を牛耳られた信者への脅迫であり、敬虔なそして小さな民衆の強迫的同調を調達するにはたしかに好都合であったにちがいない（Weber 1920）。

アナタを介してカレの真意を聞ける場合はまだいいが、そのような媒介者が欠けている場合が問題である。直接カレをつかまえて聞いたとしても、本当になにか企んでいれば本当のことは言わないだろう。カレとダレカの見えない回廊には、すがたもかたちも本当のことばも知らない他なる者が潜んでいる。ワタシは、ネットワークのこのもっとも暗い闇でうねる見えない他者性とのダイレクトインターフェイスを強いられる。

暗闇でオロチのようにうねるこの他者性と直接に接合することは、かなりの恐怖をとまなうだろう。暗闇を照らすのはひとりの信頼できるアナタである。しかし信頼できる友人をもたないワタシは、たったひとりでこの暗闇のうねりと対峙しなければならない。小さなワタシAは、浮き足立っていっそう疑りぶかくなるか、おじけづいて過剰に迎合的になるかどちらかだろう。そのワタシの行動は、他者の側にも対応する行動をよびおこす可能性が高い。こうして、暗闇のネットワーク全体が疑心暗鬼に駆られてうねり出すのである<sup>54)</sup>。

#### 5-2.9 オニの鏡像

思春期から青年期にかけて、人間はいったん形成したワタシ-アナタのネットワークを越えてまだ話したことのないダレカそしてミンナとのネットワークを形成しなければならない局面をむかえる。まだ信頼できるアナタができないうちに、ミンナという見えないネットワークと対応を迫られることは、多感な少年はもちろん、普通の大人にとってもかなりつよい負荷となるだろう。正体不明の落書きや陰湿なイジメ、差出人不明のブラックメールなどは、見えないダレカという「原初の他者性」を起動せずにはいない。分裂病をはじめ、対人関係をめぐる困難がこの時期に多発するのは、まさに、この「ダレカ」という他者性とそれなりのインターフェイスを形成しなければならないという発達上の課題と関係していると考えられる。

54) 日本神話の「ヤマタのオロチ」は、洪水で溢れた川でも森の異民族でもなく、疑心暗鬼でうねりだしたワタシたち自身のネットワークそれ自体である、というのが筆者のみたある年の初夢の解釈である。いったんダレカが生贄になると、ダレもが、生贄にだけはなりたくない、と考えるだろう。そして、多数派につこうとするその運動が、実際に多数派をつくり、恐怖の同調と連帯を生み出す。この連帯は恐怖が持続している間しかつづかない。忘れられた頃、オロチはふたたびあたらしい生贄をもとめて暗闇のなかからやってくるだろう。オロチの頭が8つで胴体がひとつなのは、複数のソシオンが結託することでうねりはじめるネットワークを意味しており、尻尾にかくされた剣はその暗闇の結託による暴力の象徴である、と考えられる(解釈できる)。怖いもの知らずの暴れん坊であったササノオがオロチの尻尾から取り出した剣が、鏡と勾玉とともに、3種の神器として公の場に祀られることは、古代公権力の誕生と統治の論理を象徴しているようにおもわれて興味深い。中心の鏡は、八百万の神々に「鏡像」(「清く明き心」)をかざす「神聖な鏡」(林房雄1988)であり、それを守るのが大いなるアナタ、聖なる鏡とともに降臨した神の子孫と伝えられる「大君」であったのではないだろうか。



オニゴッコ<sup>55)</sup>やカクレンボは、このダレカを内蔵するミンナの暗闇とひとりでインターフェイスをつくるためのコミュニケーション・ゲームであると考えられる。オニがオニであることをやめるためには、ダレカをつかまえて、目の前でひとりのアナタであることを暴かなければならない。カクレンボも、もの陰に隠れた他者性を見つけてアナタとして名指すことに成功したとき<sup>56)</sup>、やっとなつたワタシはオニの役割から解放される。

## 6. 多重環マトリックス

### 6-1. 視点と伝聞

何かを誰かに語るときは、「とワタシはおもう」とその思った本人が自分の考えを語る、というのが、これまで議論してきたコミュニケーションのモデルである。語るときは、自分の考えを語る、ということを前提にしているので、話を聞いた人は、語り手への信頼(荷重)を媒介にしてそのつど自分の見方(荷重)を形成し、その自分の考えをふたたび誰かに物語る、というコミュニケーションのサイクルが成立する。

これに対し、自分がAをどう見ているかを語るだけでなく、他人がAをどう見ているかを、そのまま誰かに語る、という「伝聞性」のコミュニケーションがいろいろと考えられる。「CさんがアナタAさんのことをいい人だと言っていましたよ」とBがワタシAに伝えるような媒介性の高いコミュニケーションで、観察者(最初の発言者)が誰であるかが、メッセージに付加されたまま「話題の人A」とともに、いっしょにネットワークを巡るこ

55) 道をふさぐオニが名前を呼ばれば退散する、という民話があるが、それは、暗闇でオロチのようにうねるネットワークを「名づけ」て、その正体をアナタとして明るみに引き出したとき、ヒトはその見えない他者性の恐怖から解放される、という事情を物語っているのかもしれない。

ちなみに、オニのようなイジメッコはたくさんいるが、ほんとうの「オニ」は(残念なことに、そして恐ろしいことに)、たったひとりの「信頼できるアナタ」をも得られなかったイジメラレッコの方から生まれる理論的可能性がある。ワタシに本当の鏡像をかざしてくれる信頼できるアナタがいなければ、ワタシは自分の姿を恥じることは愚か、みることも知ることも、したがって選ぶこともできないからだ。

欲動の突き上げに捉えられたとき、自分の本当の顔をしらないそのヒトは、とつぜんオニとなって他の人を襲うかもしれない。じっさい、物語のなかのオニは、しばしばダレカ誰でもいいヒトをさらって、自分の手でその自由を拘束しようとする。それは、ワタシを不当に疎外しつづけるもうひとつの自由である他者をつかまえて、ひとりのアナタとしてワタシの目のまえに引きだして、むりやり関係を結ぼうとする、悲しい自由のドラマである。オニのような罪を犯した少年たちの「叱って欲しかった」というつぶやきは、自己回帰する欲動の渦に吞まれて化け者となりかけたヒトが、自分の本当の姿をきちんと映し出してくれる正確な「鏡」を求めて発した、まともなつぶやきではないだろうか。

逆に、「世間をアツと言わせたかった」という犯罪者は、化け物のように変容した自分の姿をミンナに見せつけることによって、荷重のふやけた妄想的存在と成り果てたワタシをリアルな実在として他者とメディアに承認させようとしたのだろう。

権力者もまた、虐められたオニと同じように、このダレカという姿の見えない他者たちに脅える。権力者の身のまわりには、ご機嫌取りは集まっても、本当のことを言ってくれるアナタは育ちにくいからだ。彼らが盗聴を命令し間諜を放つのは、このミンナの動静をさぐるためである。

56) ちなみに、真宗の現代化に功績のあった大谷光紹師は、深い霧のなかで友人から「大谷くん!」と呼びかけられて振り向いたが誰もいなかったときの不安な体験を、宗教的次元をもつ自分の重要な経験のひとつとしてあげている(大谷1967)。

とになる。荷重情報はそのつど変換されずに、発言者名とともにメタレベルに保存される、と考えることができる<sup>57)</sup>。最初の発言者である「見ている人」は、コミュニケーションによって変わらない。つまり、話題の人Aの肩の添字は、はじめから $A^b$ なら $A^b$ で、マトリックスのループが回っても途中で変わらず同一のままである。

図6-1はこの視点の変換をふくまないカッコを保存したままのコミュニケーションを網羅的に整理したものである。「話題の人」(体)、「話す人」(口)、「聞く人」(耳)という3つの次元に、もうひとつ「見ている人」(目)が加わった4次元のマトリックス(の一部)と考えていただくとわかりやすい。図は「話題の人」(体)をAに固定して、その4次元マトリックスを疑似的に2次元化したものである。本来の4次元多重環マトリックスには、「『カレは信用できない』とアナタはおっしゃるのですね」といったタイプから『『アイツはサギ師だ』とダレカが言うのをカレが耳にした、というアナタのお話はたしかに承りました』、といったタイプまで、ワタシA、アナタB、カレC、ダレカDについてのすべての伝言性のコミュニケーション・パターンが包含されている。

本稿ではこれまで語られる人をワタシAに限定して考察を展開してきた。この多重マトリックスではコミュニケーションの主題となる話題の人(体)をAひとりに限定しても、ワタシA、アナタB、カレC、ダレカDのそれぞれが見ているAの像は、 $A^a$ 、 $A^b$ 、 $A^c$ 、 $A^d$ で4つ誕生する。したがって、AについてBがCに語る時、1)  $A^a : B \rightarrow C$ 、2)  $A^b : B \rightarrow C$ 、3)  $A^c : B \rightarrow C$ 、4)  $A^d : B \rightarrow C$ 、の4つの話し方が区別される。たとえば「Aは『自分は潔白だ』と言っている」、「ワタシBとしては『Aは潔白だ』と思う」、「Cは『Aは灰色だ』と思っている」、「ダレカDが『Aは真っ黒だ』と言っている」という具合である。アナタがカレに語るこれら4種のコミュニケーションが多重環マトリックス(図6-1、6-2)では3列目の5行目から8行目のクラスターにひとつにまとめられて配列されることになる<sup>58)</sup>。

多重環マトリックスでは、それぞれのメンバーについてひとりひとりがネットワーク上で誰かに(自分もふくめて)語る、とすると、全部で $4 \times 4 \times 4 = 64$ 個のコミュニケーション

57) 1次のコミュニケーションをサブレベルへの還元とすると、カッコを保存したままの2次のコミュニケーションはメタレベルへの〈くり込み〉をとまなう、といえる。前者では「バカ者!」とか「もうきらい!」とか「大好き!」というふうに、感情表出的な発話のモードがとられ、後者では「ワタシはアナタの知性を疑います」とか「『もうアナタを信じられなくなった』ことをお伝えしなければなりません」といった客観的で報告的なコメントリーのモードが支配的になる、と考えられる。

58) 簡略版マトリックス図2-1では、4つのうち、ふたつ目のはじめに言った人(実際に見ている人)と伝える人が同じ人になっているコミュニケーション $A^b : B \rightarrow C$ しか考えていない。

ンパターンが生成される。この 64 パターンを 2 次元マトリックスに表して、それらのあいだのコミュニケーションループを色分けした線で示したのが図 6-1 である。49 頁に掲載した図 2-1 は、そのなかの「見る人」と「語る人」が同一であるもの（図 6-2 で薄い網掛けで示した 1 行目、6 行目、11 行目、16 行目の 4 つのセル）を順に抜き出して、より本質的なループをわかりやすく構成した簡略版マトリックスであった、ということになる。

## 6-2. 2 重の媒介

アナタ B がソシオン C についてワタシ A に語る ( $C^b : B \rightarrow A$ )、としよう。ソシオンの理論枠組みによれば、この媒介コミュニケーションにおいて、カレ C にたいするアナタ B の荷重情報  $C^b$  のリアリティは、B に対するワタシ A の信頼荷重  $B^a$  の媒介によって増幅あるいは減衰される。

$$\Delta C^a = \Delta C^b \times B^a$$

媒介するソシオン B に対するワタシ A の信頼荷重  $B^a$  が、コミュニケーションにおけるリアリティの増幅係数として機能する、というこの命題は、ソシオン理論のもっとも重要な仮定のひとつである<sup>59)</sup>。

ここで、2 重の媒介コミュニケーションとして、たとえば、「カレ C が『アナタ A のことをすばらしい人だ』と言っていました」とアナタ B がワタシ A に語るのを聞く ( $A^c : B \rightarrow A$ ) 場合を考えてみよう。この 2 重媒介ではまず、最初の発言 ( $A^c : C \rightarrow B$ ) をしたソシオン C にたいして、それを聞いた人 B がおいている信頼  $C^b$  が C の発言内容に対する B の荷重  $A^b$  を増減する ( $\Delta A^b = \Delta A^c \times C^b$ )。次に、そのことをワタシ A に伝える B にたいしてワタシ A がおいている信頼  $B^a$  が、その荷重像をさらに増幅<sup>60)</sup>する。こうして、2 重の

59) アナタの話は、アナタへのワタシの信頼しだいで、真に受けられたり、一笑に付されたりする、というこの問題の重要性はいくら強調されてもされすぎることではない。それはコミュニケーションを情報(メッセージ)の伝達、と考えてきた従来の理論とソシオン理論が決定的に異なる点である。人間のコミュニケーションは、メッセージを伝達するだけではない。それと同時にメッセージの信憑性にかかわる荷重成分がかならずふくまれている。社会的コミュニケーションにおける「荷重」の増幅変換は、伝達されるメッセージの「内容」に優先する。第一次的に重要なのは、伝達されるメッセージの内容である以前に、伝達者への信頼度の大きさなのだ。中身が何であるかよりも、それを言った人がどのぐらい信用できるか、という方が社会的情報伝達にとって、より根本的である。

60) レインは、P が O をどうみているかについての O の考えについての P の考えを  $P \rightarrow (O \rightarrow (P \rightarrow O))$  で表わし、 $P \rightarrow (O \rightarrow (P \rightarrow (O \rightarrow P)))$ 、さらに、 $P \rightarrow (O \rightarrow (P \rightarrow (O \rightarrow (P \rightarrow O))))$  ……とカッコが無限につづくかのよう考えたようだが (Laing 1961=1975 : 233-228)、それはあやまりである。意識はそれほどたくさんのカッコをつけたままの変換次数の高い情報を把持できない、と昔ある論文に書いてあったと先生が言った、とアナタから聞いたと友達が言っているが本当か、という程度で十分に混乱することからもあきらかであろう。

媒介では2段の増幅機能が発生する。

$$\Delta A^a = \Delta A^c \times C^b \times B^a$$

「カレがアナタのことを誉めていましたよ」などと聞いてうれしくなるのは、この2段の増幅によってポジオン荷重が増えるからである。反対に、「ダレカが悪口を言っていた」ということを知ったときの落ち込みが大きいのもおなじ効果によってネクロンの荷重が増えるからである。

### 6-3. ループシフトと媒介増幅

この論考の最後に、複数のループから帰還する鏡像荷重がどのように変換されて、ワタシ A の自己像を多重に決定するにいたるのか、予備的な検討をくわえることを通して、モデルの有効性を簡単に探ってみよう。

図6-2 左上部の網かけのセル群をごらんいただきたい。ワタシに帰還する鏡像の種類は、アナタ B の見たワタシ A<sup>b</sup>、カレ C の見たワタシ A<sup>c</sup>、ダレカ D の見たワタシ A<sup>d</sup>、そしてワタシ A の見たワタシ A<sup>a</sup> の4種類あって、それぞれの荷重情報は、1) アナタの口、2) カレの口、3) ダレカの口、そして4) ワタシの口のいずれの「口」からでもワタシの耳に届きうる。ワタシがワタシについて語るのを聞くループ（セル）に対して、アナタがワタシについて語るのを聞く、カレがワタシについて語るのを聞く、ダレカがワタシについて語るのを聞く、の3本のループからシフトする破線が書き入れてある。媒介増幅（カッコはずし）はまさにこのループシフトで発生する<sup>61)</sup>。ワタシ A はこの変換によって得たダレソレがワタシについてどう思っているかという情報をワタシ自身に語る、というかたちで自己回帰性のループに取り込むことになる。それぞれのケースについて、荷重変換のメカニズムを簡単に整理してみる。

61) この多重環モデルでは、ループがシフトするとき、媒介による荷重の演算操作が発生すると考えることができる。この荷重の媒介演算をともなう多重コミュニケーションは荷重備給をめぐる選択性を増進させ、「思考」の運動を誘発する。突然のループシフトと、それによってもたらされる予期荷重のズレ、不条理さの感覚（おかしさ=変だ）がループ動作を解除して「負荷脱離」による余剰荷重があふれ出すのがジョークによる笑いの核心である（「笑いの統一理論」（木村1983）を参照）。ちなみに、漫才や落語においては、このループシフト（誰が話しているのか、の急速なスイッチング——特に落語、何について話しているかのズレ——漫才のボケ、など）が重要な笑いの起動因になっている。この話題になるソシオンをワタシ A から X とおきかえると、多重環マトリックスは多重媒介によるコミュニケーションの一般モデルに変身する。ダイオン、トリオンによる荷重変換をともなう、ソシオン・ネットワークの多重媒介コミュニケーションモデルを「ソシオトロン sociotron」と（最終的に！）命名することにしたい。その詳細は別の稿で論じる。

#### 6-4.1 ループの演算

まず、アナタ B が見ているワタシ A についてアナタ B が言ったこと  $A^b$  を、ワタシ A が聞いて自己像  $A^a$  に帰還するとき、その帰還量  $\Delta A^a$  は、ワタシ A のアナタ B に対する信頼荷重  $B^a$  を係数にした変換になる(1)。この媒介による変換をとりあえず積の演算 \* で表わそう。

$$\begin{aligned} A^b &: B \rightarrow A \\ \Delta A^a &= \Delta A^b * B^a \quad \dots\dots(1) \end{aligned}$$

同様にカレ C から直接知らされたカレの見たワタシ A の評価像  $A^c : C \rightarrow A$  は、カレ C に対する信頼荷重  $C^a$  との積になる(2)。カレの話がアナタの伝言によるものならば、カレへのアナタの信頼と、カレの媒介者であるアナタへのワタシの信頼荷重の積となる(3)。

$$\begin{aligned} A^c &: C \rightarrow A \\ \Delta A^a &= \Delta A^c * C^a \quad \dots\dots(2) \end{aligned}$$

あるいは

$$\begin{aligned} A^c &: B \rightarrow A \\ \Delta A^a &= \Delta A^c * C^b * B^a \quad \dots\dots(3) \end{aligned}$$

さらに、ダレカ D から入るうわさのワタシ A の情報  $A^d : D \rightarrow A$  は、D にたいする信頼荷重  $D^a$  (例えば週刊誌や隣人のうわさが気になる度合い) がさらに掛け合わされる(4)。このうわさがカレ C の通報  $A^d : C \rightarrow A$  である場合は、カレのダレカへの荷重  $D^c$  とワタシのカレへの荷重  $C^a$  が掛かり(5)、アナタ B からの情報  $A^d : B \rightarrow A$  である場合はアナタのダレカへの荷重  $D^b$  とワタシのアナタへの信頼荷重  $B^a$  が掛け合わされる(6)。ダレカ D の情報をカレ C がアナタ B に伝えて、それをアナタがワタシ A に教えてくれた場合  $A^d : C \rightarrow B \rightarrow A$  はさらに、カレのダレカへの荷重  $D^c$  に、アナタのカレへの信頼荷重  $C^b$  とワタシのアナタへの信頼荷重  $B^a$  がいっしょに掛け合わされることになる(7)。

$$\begin{aligned} A^d &: D \rightarrow A \\ \Delta A^a &= \Delta A^d * D^a \quad \dots\dots(4) \end{aligned}$$

$$A^d : C \rightarrow A$$

$$\Delta A^a = \Delta A^d * D^c * C^a \quad \dots\dots(5)$$

$$A^d : B \rightarrow A \quad \dots\dots(6)$$

$$\Delta A^a = \Delta A^d * D^b * B^a$$

$$A^d : C \rightarrow B \rightarrow A$$

$$\Delta A^a = \Delta A^d * D^c * C^b * B^a \quad \dots\dots(7)$$

これにワタシ A が少し前に抱いていた自己像の荷重の自己回帰  $A^a : A \rightarrow A$  が加わる (0)。ワタシはいつも自分を全面的に信頼しているわけではないので、語る者としての自己への信頼つまり自信もしくは懐疑の程度  $A^a$  が、ループに入力された自己荷重  $A^a (t-1)$  に対する増幅係数になる。

$$A^a : A \rightarrow A$$

$$\Delta A^a t = \Delta A^a (t-1) * A^a \quad \dots\dots(0)$$

#### 6-4.2 鏡像の複合

こうして、ワタシ A が自分について自分に語るループのなかでは、複数の鏡像がそれぞれのループにのって多重に回帰することになる。それらの複数のループの競合と振動が、「自己意識」として知られる人間に特有の思考と感情を生みだす。それらの複数のループの一部、たとえばカレ C の言うこと  $A^c$  は「気にしない」とか、「考えない」とか、「忘れてしまう」といったかたちで、「解離」されたり「抑圧」されたりすることがよくあるが<sup>62)</sup>、一般にはそれぞれのループの鏡像荷重はそれなりのかたちで合成される、と考えていいだろう。単純な合成はとりあえずつぎのモードで表わされる。

62) 2度と口をきかない、というのはネットワークにおける「解離」以外のなにものでもない。解離や抑圧といった防衛機制が働くのは、個人内部の意識（サブネットワーク）だけではないことに注目してほしい。ソシオネットワークでは、実際のコミュニケーションについて、防衛機制が働く。人前で口にしてはいけないこと、誰にも語ってはならないこと、ウソでも話さなければならぬこと、などなどいろいろなレベルのタブーや神話はまさにネットワークの防衛機制にかかわる社会的無意識であり、無意識のコミュニケーション規制である。語られなかったことは無かったことになる、少なくともリアルにならない。忘れたことは語らないし、語られないことは忘れられる。こうして、誰もみとめたくないトラウマやスティグマは共同主観的に否認され、ときに隠蔽される。戦争体験が語られるようになるまで 40 年の年月が必要であったし、いまま重すぎる体験を他人に語るができないヒロシマの人は少なくない。世代間の物語/コミュニケーションが、選択的な伝達と隠蔽をつうじて、「神話」を構成するにいたるメカニズムは高度に政治的であるが、その構造が（激しく生きられているとはいえ）十分に意識化されているとはいいいがたい。考えるための道具が必要とされる所以である。

$$\Sigma A^a = 1 + 2 + 3 + 4 + 5 + 6 + 7 + 0$$

以上は、アナタ B やカレ C やダレカ D がワタシ A に語るその物語から、ワタシ自身についての荷重像が生成される論理である。アナタ B がアナタ自身の荷重像を形成するときもおなじ論理が作動するだろう。カレ C そしてダレカ D についても同様である。この節で試論的に見たループシフトの荷重変換論理は、図 6 のすべてのコミュニケーションループの束について適用される。とりあえず本稿では、ワタシ A の鏡像をめぐるコミュニケーションに終始したが、この 64 個のセルからなるマトリックスと同様の多重マトリックスはアナタ B についても、カレ C についても、またダレカ D についても構成できる。次稿以降それぞれについて検討していくことになるが、ワタシ A の視点からみたアナタやカレ、ダレカの操縦や懐柔、他者支配のコミュニケーション・パターンを考える上で、それなりに役立つかもしれない。

それぞれのソシオンは、他者の場所から帰還したこれらの鏡像を内部のループで回帰させながら、自分の荷重像を探し、選び、退け、合成することで自分固有の荷重像を形成する。そのとき、鏡像荷重も信頼係数もプラスだけではない、という点が決定的に重要である。つまり、欠如の自己像も負の増幅もありうる。これら複数の鏡像のあいだで、もうひとつの媒介による演算、つまり N 荷重を含むトリオンの演算とその合成が起こる(注 23 を参照)、と仮定すると、かなり興味深い議論が展開できるだろう。

おそらく、その結果、ネットワークに「分裂結合」と「ループの封鎖」が発生することが示されるだろう。つまり、コミュニケーションが遮断されることで世界が閉ざされるだけでなく、話せば話すほど聞けば聞くほど反対の意見が真実に思われてくるようなコミュニケーションが存在することが明らかにされるはずである。対抗と否定が、連帯と信頼を「強化」するだけでなく、「誕生」すらさせるようなコミュニケーションが存在し、そこに「分裂」することによって「結合」を促進するネットワークの力学が発生すると予測される(木村・松尾・渡邊 2001c)。そこからかなり深刻な問題が帰結することになるが、その詳細な検討はまたべつの機会におくらなければならない。

この論考の目的は、ネットワークのなかで展開するであろう信頼の自己組織化のプロセスをコミュニケーションのモードにそって理論的に検討すること、そしてさらに将来においてコンピュータ・シミュレーションへ接合するために概念枠組を整えることにある。

それぞれのソシオンが、ダイオンとトリオンの変換動作を介して相互に鏡像を誘導しながら、《くり込み-くり出し》を重ねてネットワークを自己組織化していく論理と、そ

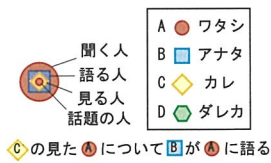
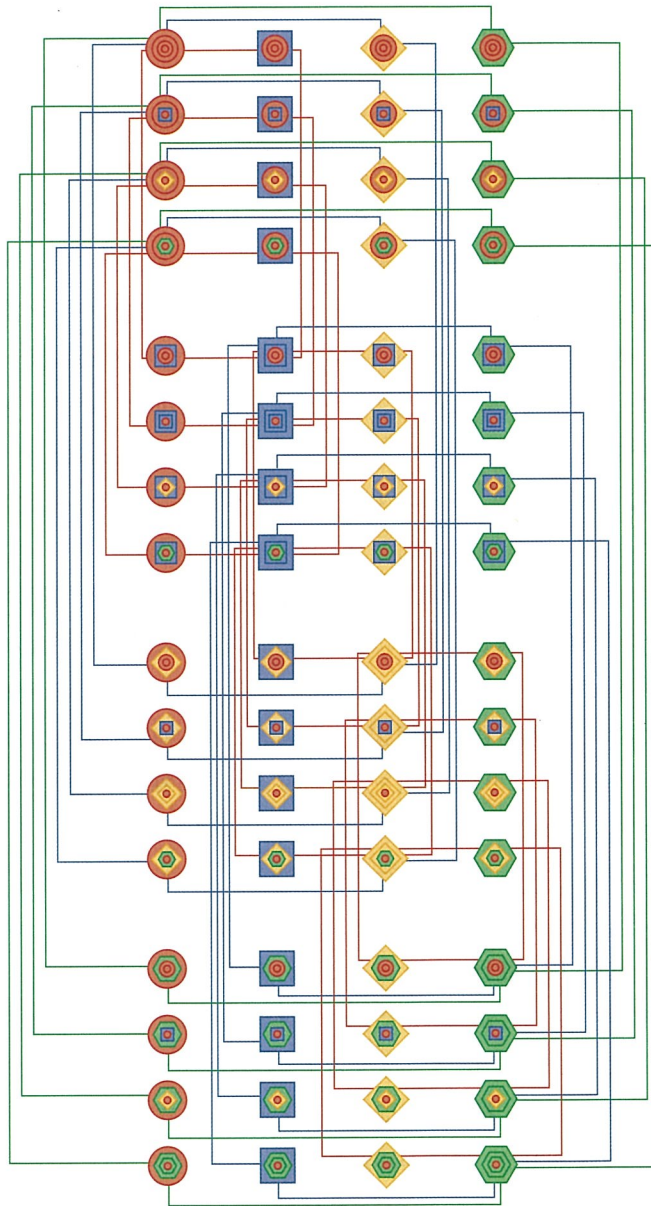


図 6-1 多重環マトリックス

図2-3bに「見る人」を加えてパターン化したものである。重ね図の中心を囲む2番目の図形が「見る人」(目)を表わす。



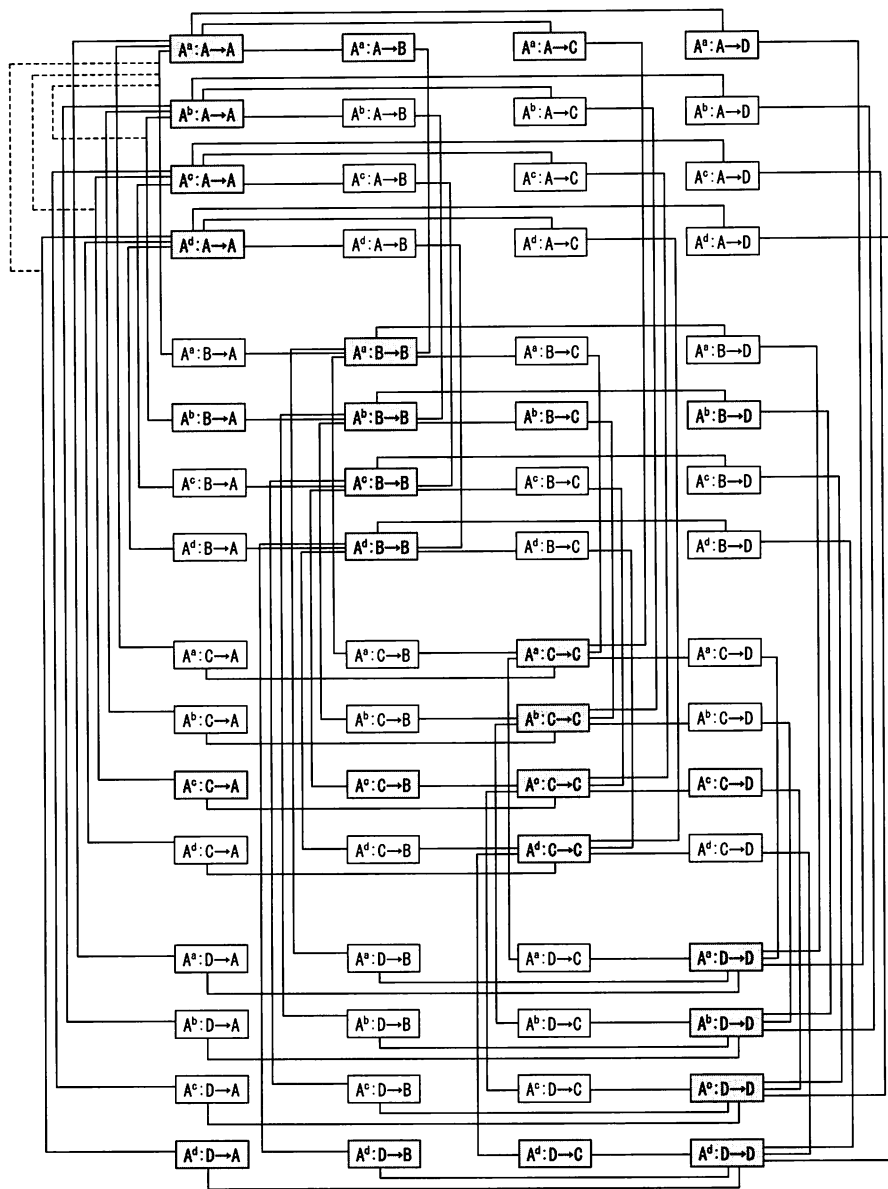


図 6-2 A についてのコミュニケーション・ループ

図6-1の変換式バージョン。薄い網掛けで示した1・6・11・16行目のセルは図2-3bのマトリクス全体に相当する。濃い網掛けで示した4つのセルの列はA、B、C、D、それぞれの自己回帰性の意識を表わす。この図は話題の人がAの場合のチャートで、B、C、Dについてはそれぞれ同様のチャートが全部で4枚構成される。左上に破線で示したブリッジはループのシフトを表わす。

れ自体、ネットワークの自己意識ともいえる個体を越えた回帰性のコミュニケーションの構造を、「排除」された社会的無意識の領域を含めて、できるだけ明晰にかいまみること、それがソシオン理論の欲望である<sup>63)</sup>。(つづく)

## 文献

- 雨宮俊彦・木村洋二・藤沢等、1993、「ソシオンの理論(3)」『関西大学社会学部紀要』25(1)：63-163。
- Bateson, G, 1972, *Steps to an Ecology of Mind*, New York: Ballantine book. (ペイトソン、1990、佐藤良明訳、『精神の生態学』思索社。)
- Beckett, S., 1958, *Krapp's Last Tape*. (ベケット、1967、安藤信也・高橋康也訳、『クラブの最後のテープ』白水社。)
- Berger, Peter L. and Thomas Luckmann, 1966, *The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge*, New York. (バーガーとルックマン、1977、山口節郎訳、『日常世界の構成——アイデンティティと社会の弁証法』新曜社。)
- Boissevain, J., 1974, *Friends of Friends: Networks, Manipulators and Coalitions*, Pavilion series, social anthropology, Oxford: Blackwell. (ボワセベン、1986、岩上真珠・池岡義孝訳、『友達の友達』未来社。)
- Buber, M., 1923, *Ich und Du*. (ブーバー、1979、植田重雄訳、『我と汝・対話』岩波書店。)
- Cooley, C.H., 1902, *Human Nature and the Social Order*, Charles Scribner's Sons. (クーリー、1921、納武津訳、『社会と我：人間性と社会秩序』日本評論社。)
- 土居建郎・安永浩編、1979、『分裂病の精神病理 6』東京大学出版会。

63) 最後に、実証の問題、理論の検証をめぐる問題についてひとことふれておきたい。  
ソシオン理論は、人類の自己理解を促進する単なる道具として開発されたまったくの仮説にすぎない。とくに木村のこの間の課題は、革命や肅清や生贓、宗教的な熱狂をとまなう「非合理的」な領域、さらに詐欺や虚言をはじめ、裏切りや密告、ひいては常軌を逸した犯罪行為のようなネクロな/負性の問題領域にたいする合理的な理解と科学的説明が可能となるような理論フレームをとりあえずともかくにも構築してみることにあった。  
一般に、そうしたネクロ問題は、通常の社会調査や心理テストによる実証のみちはほとんど閉ざされている。なにしろ本人に聞いてもめったに答えてもらえないし、まわりにも秘められることがほとんどである。しかし、だからといって人間科学が思考を停止し、手をこまねき、人類の最重要問題を探究のリストから排除していい、というわけではない。「異常」や「病理」と称されるネクロな人々も、立派なそして悲しい人類の一員である以上、人間の科学は、人類のかなりのパーセントをしめるこれらの人々のこころの動作について合理的に説明し、理解し、そしてもし可能ならば、すこしでも犠牲を減らすための手立てなりをまじめに考える必要があることは疑えないだろう。  
ただし、ネクロ問題自体が、隠蔽と否認と解離によって、ようやく社会的生存がはかられるような、防衛機制の作動領域に属していることが、その科学的探究を、人類の真の姿に対する自己洞察を妨げてきたことは否めない。それ自体が、生きられはしても存在することが否認される負の欲動、「まとも」な人間からは承認されない「怪しい」「馬鹿げた」「狂気の」「おかしな」人間の在り方と行動の領域を、「まじめに」「真剣に」研究する必要も意義もない、と考えられやすいからである。かつて、「笑いの統一理論」を書きはじめたとき、尊敬する友人は、笑いをマジメに研究する価値があるのか、と訝った。肅清や狂気の問題を扱いはじめたとき、木村は異常な問題に興味を持ちすぎると敬愛する共同研究者のひとりにしかられたことをいまこの最後の注を書きながらつつかしく思い出している。  
科学として構築された仮説群は、まずその論理整合性によって、さらにその説明力と整理索出能力によって、そして最後に検証によって選択淘汰にかけられる。ソシオン理論は、まずは検証に値する仮説群であろう、と欲するひとつの科学的な思考の枠組みであるにすぎない。もちろん、犯罪の裁判記録や調書、革命家や宗教者などからのドキュメントによる「検証」にたいして完全に開かれていることはいうまでもない。しかし、それゆえにこそ、仮説群の一貫性と説明力そして整理索出能力にたいする覚めた自己検討の作業と、当面の読者諸兄姉の体験と洞察のちからを借りた吟味と批判が必要とされる次第である。

- Foucault, M., 1975 *Surveiller et punir: Naissance de la prison*, Gallimard. (フーコー、1977、田村俣訳、『監獄の誕生——監視と処罰』新潮社。)
- Freud, S., 1921, *Massenpsychologie und Ich-Analyse*. (フロイト、1970、井村恒郎ほか訳、「集団心理学と自我の分析」『フロイト著作集 6』人文書院。)
- Fukuyama, F., 1995, *Trust: The Social Virtues and the creation of Prosperity*, London, Hamilton. (フクヤマ、1996、加藤寛訳、『「信」無くば立たず——「歴史の終わり」後、何が繁栄の鍵を握るのか』三笠書房。)
- Gabel, J., 1962, *La fausse conscience: Essai sur la reification*, Les Editions de Minuit. (ガベル、木村洋二訳、『虚偽意識——物象化と分裂病の社会学』人文書院。)
- 橋爪大三郎、1993、『橋爪大三郎コレクション1 身体論』勁草書房。
- 平田清明、1971、『経済学と歴史認識』岩波書店。
- 林房雄、1988、『天皇の起源』夏目書房。
- 井村恒郎、1984、『井村恒夫著作集 第3巻 分裂病家族の研究』みすず書房。
- Kafka, F., 1925, *Der Prozess*. (カフカ、1971、原田義人訳、『審判』新潮社。)
- Kafka, F., 1926, *Das Schloss*. (カフカ、1953、中野孝次・萩原芳昭訳、『城』新潮社。)
- 神田橋條治、1984、『精神科診断面接のコツ』岩崎学術出版社。
- 河合隼雄、1982、『昔話と日本人の心』岩波書店。
- 木村敏、1975、『分裂病の現象学』弘文堂。
- 木村敏、1990、『分裂病と他者』弘文堂。
- 木村洋二、1983、『笑いの社会学』世界思想社。
- 木村洋二、1995、『視線と「私」——鏡像のネットワークとしての社会』弘文堂。
- 木村洋二、1999 a、「ソシオンの一般理論 (I)」『関西大学社会学部紀要』30 (3) : 65-126。
- 木村洋二、2000、「ソシオンの一般理論 (II)」『関西大学社会学部紀要』31 (2) : 63-149。
- 木村洋二、2001 a、「ソシオンの一般理論 (III) ——トリオンからソシオスへ」『関西大学社会学部紀要』32 (2) : 1-104。
- 木村洋二、2002、「ソシオンの一般理論 (IV) ——愛と欲望のキューブモデルとソシオネットの力学系」『関西大学社会学部紀要』33 (1) : 1-44。
- 木村洋二・渡邊太、2001 b、「親・子・カルトのトライアド——信者と家族と教団のソシオン・ネットワーク分析」『関西大学社会学部紀要』32 (2) : 105-175。
- 木村洋二・松尾繁樹・渡邊太、2001 c、「イジメのモードとネットワークの力学——排除のソシオン理論をめざして」『関西大学社会学部紀要』32 (2) : 177-204。
- Lacan, J., [1936] 1966, *Le stade du miroir comme formateur de la fonction du Je*, *Ecrits*, Paris; Seuil. (ラカン、1972、宮本忠雄訳、「〈わたし〉の機能を形成するものとしての鏡像段階」『エクリ』1、弘文堂。)
- Lacan, J., [1955] 1966, *La chose freudienne ou sens du retour a Freud en psychanalyse*, *Ecrits*, Paris; Seuil. (ラカン、1972、佐々木孝次訳、「フロイト的事象、あるいは精神分析におけるフロイトの回帰への〈意味〉」『エクリ』2、弘文堂。)
- Lacan, J., 1981, *Le Seminaire, Livre III : Psychoses*, Paris; Seuil. (ラカン、1987、小出浩之ほか訳、『精神病 上・下』岩波書店。)
- Laing, R.D., 1961, *Self and Others*, London: Tavistock Publication. (レイン、1975、志貴春彦・笠原嘉

- 訳、『自己と他者』みすず書房.)
- Levinas, E., 1948; 1979, *Le temps et l'autre*, Fata Morgana, Paris. (レヴィナス、1986、原田佳彦訳、『時間と他者』法政大学出版会.)
- Lidz, T., et al, 1971, *Schizophrenia and the family 2nd ed*, International Universities Press. (リッツ他、1985、高臣武史ほか訳、『精神分裂病と家族』誠信書房.)
- Luhmann, N., 1973, *Vertrauen: ein Mechanismus der Reduktion*, (ルーマン、1990、大庭健・正村俊之訳、『信頼——社会的な複雑性の縮減メカニズム』勁草書房.)
- 正村俊之、1995、『秘密と恥——日本社会のコミュニケーション構造』勁草書房.
- Marx, K. and Engels, F., 1845-46, *Die deutsche Ideologie*, (マルクスとエンゲルス、1963、真下真一ほか訳、『ドイツ・イデオロギー』『マルクス・エンゲルス全集 第3巻』大月書店.)
- McLuhan, M., 1962, *The Gutenberg Galaxy: The Making of Typographic Man*, University of Toronto Press. (マクルーハン、1986、高儀進訳、『グーテンベルクの銀河系——活字の人間の形成』竹内書店.)
- McNamee, Sheila & Kenneth J. Gergen ed., 1992, *Therapy as Social Construction*, Sage Publication. (マクナミーとガーゲン、1997、野口裕二・野村直樹訳、『ナラティブ・セラピー——社会構成主義の実践』金剛出版.)
- Mead, G.H., 1934, *Mind, Self and Society: from the Standpoint of a Social Behaviorist*, The University of Chicago Press. (ミード、1973、稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳、『精神・自我・社会』青木書店.)
- Merton, R.K., 1949, *Social Theory and Social Structure: Toward the Codification of Theory and Research*, Glencoe, Ill.: Free Press. (マートン、1961、森東吾ほか訳、『社会理論と社会構造』みすず書房.)
- 中井久夫、1992、『中井久夫著作集』岩崎学術出版社.
- 永井良和、2000、『探偵の社会史1 尾行者たちの街角』世織書房.
- 西田幾多郎、1911、『善の研究』弘道館.
- 大村英昭・宝月誠、1979、『逸脱の社会学——烙印の構図とアノミー』新曜社.
- 大谷光紹、1967、『こころの軌跡』講談社.
- Ong, W.J., 1982, *Orality and Literacy: The Technologizing of the Word*, Methuen. (オング、1991、桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳、『声の文化と文字の文化』藤原書店.)
- Rimbaud, A., 1873, *Une Saison en Enfer*. (ランボー、1938、小林秀雄訳、『地獄の季節』岩波書店.)
- 阪本俊生、1999、『プライベートのドラマトウリギー——フィクション・秘密・個人の神話』世界思想社.
- 作田啓一、1967、『恥の文化再考』筑摩書房.
- Sullivan, H.S., 1954, *The Psychiatric Interview*, New York, Norton. (サリヴァン、1986、中井久夫ほか訳、『精神医学的面接』みすず書房.)
- Sartre, J.P., 1943, *L'Être et le neant*, Editions Gallimard. (サルトル、1956、松浪信三郎訳、『存在と無I』人文書院.)
- Solschenizyn, A., 1973-75, *Der Archipel Gulag*, Rowohlt. (ソルジェニーツィン、1974、木村浩訳、『収容所群島1918-1956』新潮社.)
- 竹山道雄、1983、『ベルリンにて』『竹山道雄著作集5巻』福武書店.
- 徳岡秀雄、1987、『社会病理の分析視角——ラベリング論・再考』東京大学出版会.
- 安永浩、1977、『分裂病の論理学的精神病理——「ファントム空間」論』医学書院.
- 鷲田清一、1999、『「聴く」こと力——臨床学的試論』TBSブリタニカ.

Weber, M., 1920, *Die Protestantische Ethik und der >Geist< des Kapitalismus*, Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie, Bd. 1, 17-206. (ウェーバー、1989、大塚久雄訳、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店。)

Weizenbaum, J., 1966, *ELIZA; A Computer Program For the Study of Natural Language Communication Between Man and Machine*, Commun, ACM 10(1)36-45.

Winnicott, D.W., 1965, *The Maturation Processes and the Facilitating Environment*, The Hogarth Press, London. (ウィニコット、1977、牛島定信訳、『情緒発達の精神分析理論』岩崎学術出版社。)

—2002.7.1.受稿—